平成 29 年度

中学生の主張東京都大会

発 表 文 集

発表者のみなさん

審査員特別賞受賞者のみなさん

事務局長挨拶

発表者紹介

発表の様子

審査室の様子

結果発表を待つ発表者

審査員特別賞受賞者

講評

受賞おめでとうございます

目　次

1　こころの東京革命協会事務局長あいさつ……大　澤　裕　之（東京都青少年・治安対策本部長）……3

2　受賞作品

知事賞

・私にできること　東京都立桜修館中等教育学校　二年　柴田　葉……4

東京都教育委員会賞〔氏名五十音順〕

・気持ちを伝える大切さ　葛飾区立本田中学校　一年　飯沼　凛……5

・国境を越えた絆を　東京都立大泉高等学校附属中学校　一年　黒澤　珠月……6

会長賞〔氏名五十音順〕

・言葉のすばらしさ　東京学芸大学附属小金井中学校　二年　大川　彩希……7

・いじめを減らすためには　立正大学付属立正中学校　三年　杉野　太一……8

・本当の優しい心　立川市立立川第二中学校　二年　常盤　奏……9

・いつも感謝の気持ちを　武蔵野女子学院中学校　三年　廣瀬　加奈……10

・祖父からのメッセージ　東京学芸大学附属小金井中学校　二年　宮﨑　秋……11

・努力は格好いい　東京都立立川国際中等教育学校　一年　村岡　菜々……12

・便利さの檻　東京都立立川国際中等教育学校　一年　渡辺　結心……13

審査員特別賞〔氏名五十音順〕

・ごみのポイ捨ての現状　武蔵野女子学院中学校　三年　勝島由依……14
・私の進む道　世田谷区立東深沢中学校　三年　鷹林涼子……15
・架け橋になろう　國學院大學久我山中学校　三年　田中結子……16
・好きなものを好きと言う　東京都立桜修館中等教育学校　三年　趙浩慶……17
・傘を握りしめて　國學院大學久我山中学校　三年　中村健人……18
・気持ちを察する目と心　東京都立立川国際中等教育学校　一年　細川彩花……19
・私のモラトリアム期間　杉並区立向陽中学校　三年　松本志真……20
・日本の伝統、絶やさないように　東京都立桜修館中等教育学校　二年　水島結……21
・あたりまえをあたりまえにしない　大田区立大森第六中学校　三年　山口美莉……22
・「いただきます」がある意味　世田谷区立芦花中学校　二年　山本真由……23

会長特別賞〔氏名五十音順〕……24

4　審査員長講評……尾木和英（東京女子体育大学名誉教授）……26
5　大会概要……27
6　募集概要……28
7　応募状況……29
8　前回までの入賞者……30
9　参考　平成二十九年度「少年の主張全国大会」内閣総理大臣賞受賞作品……43

こころの東京革命協会事務局長あいさつ

東京都青少年・治安対策本部長
大澤　裕　之

ただ今御紹介いただきました、東京都青少年・治安対策本部長で、こころの東京革命協会の事務局長も兼ねております大澤でございます。「中学生の主張東京都大会」の開会に当たり、一言御挨拶を申し上げます。

本日は、「中学生の主張東京都大会」に多くの皆様の御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。本大会は、中学生の皆さんが日頃考えていることや将来への希望を発表することにより、自ら成長する機会とするとともに、広く都民の皆様に、中学生の考え方や意識について、御理解を深めていただくことを目的として開催しております。

今年度は七，四三二名の応募がありました。その中から厳正なる審査を経て選ばれた十名の皆さんにこの後、発表をしていただきます。心のこもった発表となることを大いに期待しています。

また、本日表彰される皆さんや、御応募いただいた中学生のために、御家族の御協力や先生方の御指導など、様々な御支援があったことと推察いたします。関係の皆様方に、改めて厚く御礼申し上げます。

さて、東京都では、誰もがいきいきと生活できる、活躍できる都市「ダイバーシティ」の実現を目指しております。東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向けて、今後ますます増加する海外からの訪問者や、パラリンピック競技をはじめとしたスポーツ競技などを通して、言葉や文化、障害など、様々な個性やその違いを、子供も大人も、身近に体験することが多くなってくると思います。

子供達の成長を支える大人の方々には、日ごろの行動を通して、多様性を尊重することの大切さを、子供達に伝えていただきたいと存じます。

結びに、本大会を開催するにあたりまして、審査員の方々、また、「こころの東京革命協会」のチーフアドバイザーの方々、多くの関係者の皆様に多大な御支援をいただきましたことを、改めて感謝申し上げまして、開会のあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

知事賞

私にできること

東京都立桜修館中等教育学校　二年
柴田　葉

私は、先日三〇センチ髪の毛を切りました。夏だからとか、イメージチェンジとか、失恋とか、友達からいろいろ言われましたが、全て違います。ヘアドネーションをするためです。ヘアドネーションというのは、三〇センチ以上の髪の毛を様々な病気の治療で髪の毛のない人のウィッグにして寄付するというものです。

私は、世界中のいろいろな人のことを思い、考え、寄付することや募金することが大切だと思っています。しかし、私は働いていません。だからたくさんのお金を募金することはできません。それでも誰かのためになりたくて自分でもできるものを探していました。そんなとき知り合いの人がヘアドネーションをしていて、それがどういうものかを教えてくれました。私は、その時長めに伸びていた髪をもっと長く伸ばそうと決心しました。それまでずっと肩の上だった髪の毛は、長くなると結びにくく、洗いにくく、なにより重くて邪魔でした。そんな時、何度も「やめようかな」、「一回切ってしまおうかな」と思いました。それでも、作り物よりウィッグということがばれにくいことを知り、また頑張ろうと考えを改めることができました。初めてヘアドネーションをしたのは小学六年生でした。いざ、髪を切るとなると今まで一緒だったという変な愛着がわき、あんなに嫌だったのに切りたくないと思ったりもしました。ですが、三〇センチにそろえて、一気にバサッと切られると何の役にも立たずに捨てられるよりは、こんなに大切に扱われてもう一度使われるのは私も嬉しいと感じました。そしてもう一回やろうと決意してまた努力をし始めました。二回目はその嬉しさを知っていたのであまり苦ではなくなりました。

中学生になると友達から、「髪、短い方が似合うと思うよ」と言われることが増えました。その度に訳を話しました。すると、「私もしよう」とか、「いいね」などと言ってくれました。そして、髪の伸びるペースの早い私は約二年で三〇センチ伸びました。その二年間で病気でも毎日楽しく過ごしている人や、夢や希望を持ち続けている人などいろいろな人を知りました。それとともに、切った時の考え方も変わっていました。小学六年生の時は、自分も嬉しいとか、良いことをしているという自己満足の部分が多かったように思います。ですが、今回は、この髪の毛で少しでも、もらう人が楽しい生活になればという気持ちが大きくなりました。そして、私はこれからも続けていきたいと思っています。

実際には、この髪の毛がどれくらい役に立っているかは分かりません。本当はウィッグではなくて病気を治す薬が欲しいという気持ちの方が強いと思います。それでも私のような一般的な中学生には薬の開発や大金の募金はできません。そんな私が少しのがまんでできる寄付です。もっとたくさんの人が今より幸せになってほしい、楽しい生活を送ってほしいと思い、髪の長い人にはこの寄付の存在を知ってもらいたいです。そして私も今、あたり前にあると思っているものでもそれを欲しいと思っている人がいることを忘れず、無駄遣いをしないようにしたいです。また、自分のことだけでなくクラス、日本、世界中で困っていたり、楽しくないと感じたりしている人のことを忘れず、どのようにしたらその人のためになれるかを考えていきたいです。このように考える人が増えれば未来が明るくなると私は思っています。

教育委員会賞

気持ちを伝える大切さ

葛飾区立本田中学校　一年
飯沼（いいぬま）　凛（りん）

私は、素直に気持ちを伝える大切さを知っています。ですが、言葉を伝える大切さを理解するまで、長い時間がかかりました。

私が通っていた葛飾小学校の六年一組は、二十七名の単学級でした。そのため、一年生から六年生までの六年間、クラス替えがありません。クラスには幼稚園の頃から一緒の友達も多く、九年間、遊びや勉強の時間を一緒に過ごしてきました。これだけ長い時間触れ合っていた友達であれば、時には注意をすることもありました。友達が目に余ることをしたときには、まるで先生のような口調になったこともありました。その頃私は、みんなから「ちびっこ先生」と呼ばれていました。

そんなことを何年も続けてきて五年生になったとき、気が付くと、いつの間にか友達の輪に入っていけなくなっていました。登校する時、休み時間、学校から帰って外で遊んでいる時も、何をしていても友達との間に壁を感じてしまうことが多くなっていきました。「なんでだろう。なにがいけなかったんだろう」とたくさん考え、悩み、学校に行けなくなったこともあります。何度も自分を見つめなおしました。父や母に相談したこともあります。時には、そんな私の様子を見て、担任の先生が声をかけてくれたこともありました。始めは、注意をすることは正しいことをしているとしか思っていなかったのですが、悩み続ける毎日の中で、ようやく気が付いたのです。みんなの気持ちを考えていなかったことに。

そんなある日、また小さなことで友達とぶつかってしまいました。それがきっかけとなり、思っていたこと、悩んでいたこと、全てを泣きながら友達にぶつけてしまいました。全てを吐き出して我にかえったとき、「また強い言い方をしてしまった」という気持ちで頭が真っ白になりました。しかし、それこそが私の素直な気持ちでもあったのです。

どきどきしながらみんなに目を向けると、友達が私のことを急に抱きしめて、泣きながら「いつでも助けてあげるから」と言ってくれたのです。強い言い方をしてしまったにも関わらず、真っすぐに向き合ってくれた友達の優しさにとてもおどろきました。私は、素直に気持ちを伝える大切さと、友達とわかりあえる喜びを強く感じました。そして、友達に思いやりを持って関わっていくことに胸に決めたのです。

素直な気持ちを自分の言葉で相手に伝えるということは、全ての人に出来ることではありません。悩んでいることがあっても誰にも相談できないまま学校に行けなくなったり、そのまま、命を絶ってしまう人も少なくないのです。二〇〇五年九月九日、北海道滝川市で、六年生の女子生徒が自ら命を絶つという事件が起こりました。女子生徒が残した遺書の一通には、「みんなが悪いことをした時に、先生に言いつけていたから、私に対してだんだん冷たくなり、差別をするようになったのだと思う」と書かれていました。この女の子は命を絶つ時、どんな気持ちだったのでしょうか。そのことを考えると、とても胸が痛くなります。

もしその女子生徒が、勇気を出して自分の気持ちを友達に伝えていれば、みんなと分かり合えて、命を絶つことはなかったかもしれないし、友達の考えも変わっていったのではないでしょうか。しかし、自分の気持ちを誰かに伝えることが出来ている人は少なく、そこからひきこもりや自殺をしてしまう人も数多くいます。日本の平成二十二年では、七十万人ものひきこもりの若者が存在しています。また、自殺をしてしまった人はこの十年間で毎年三万人を超え、小中高生は、毎年三百人にものぼっています。

私は今、学校に行けなくなったり、悩んだりしている人達に伝えたいです。自分の気持ちを誰かに伝えることは、とても怖くて勇気がいることです。でも、その少しの勇気を出してほしい。もし、どうしても勇気が出ない時は、近くにいる人に相談してほしい。きっとのりこえる力を与えてくれると思うから。のりこえた先には新しい未来が待っています。

私は将来、学校の先生になります。自分の経験をもとに、同じ悩みで苦しんでいる子供たちの気持ちに寄り添い、良き相談相手になりたいです。そして、子供達に思いやりの心と、自分の気持ちを言葉で伝える大切さを教えたいです。そのことさえ出来れば、どんなことでものりこえていけると、私は信じています。

教育委員会賞

国境を越えた絆を

東京都立大泉高等学校附属中学校　一年
黒澤（くろさわ）　珠月（みつき）

家が燃え、親が殺された。辛い、痛い、疲れた、苛立ち。そんな気持ちを抑え、兵士につかまらないよう全力で逃げるウガンダの子どもたち。その頃私たち日本人はなにをしているか。布団で寝ているかもしれない。食事をしているかもしれない。学校で勉強をしているかもしれない。きっと、いつも通りの当たり前の日々を送っているだろう。私は、このような当たり前の日々を送ることが幸せというのだと思う。私がそう感じはじめたのはある方の話を聞いたことがきっかけだった。

去年の七月上旬、とても暑くて、教室には冷房がついていた。そこへ、桜木奈央子さんという方がいらっしゃった。桜木さんは、ウガンダという国を中心に、写真を撮り、その様子を私たちに伝える活動をしていらっしゃるそうだ。自己紹介が終わった後、桜木さんは私たちにこのようなことを聞いてきた。

「皆さんは幸せですか。」

周りからは「幸せではない。」という声が多く聞こえた。私もそう思う。夏は暑くて、冬は寒い。事故や事件はたくさん起こるし、学校に行って勉強をしなければいけない。この時私は自由になることが幸せ、だと考えていた。この後も桜木さんの話は続いた。その中で私が最も気になった言葉は、「子ども兵士」である。大人の兵士が親を殺し、家を燃やす。そして帰るところが無くなった子どもを連れ去り、毎日、兵士になるための訓練をやらせる。逆らった人は手足を切られるため命令に従うしかない。そんな中、子ども兵士たちは、

「学校に行って勉強がしたい。」

といったそうだ。私はとても驚いた。学校に行けている自分でさえ、勉強はしたくない、と思っているのにわざわざ、勉強がしたい、というのは不思議だと思ったからだ。そして桜木さんは、

「この教室みたいに涼しいところで勉強ができるのは幸せなんですよ。」

とおっしゃった。その言葉を聞き、私は気が付いたことがある。ウガンダの家には、冷房や暖房がない。そしてウガンダでは毎日のように事故や事件が起きている。学校に行きたくても行けない子どもがたくさんいる。私たちが当たり前だと思っていることがウガンダの人たちから見れば幸せだということ。つまり当たり前の日々を送ることができている私たちは幸せだということに気がつくことができた。自由になることが幸せではない。今までの考えが変わった瞬間だった。

夏休みが明け、しばらくたつと学習発表会の練習がはじまった。私たちはウガンダのことを発表することになった。ここはどのような演出をすれば良いだろう、どのようなセリフを入れれば良いだろう。わからないことがたくさんあった。しかし、自分たちが幸せだということをわかってほしい。このような気持ちがあったからこそ最後まで頑張ることができた。本番、お客さんの拍手や涙を見て、私たちの気持ちが伝わったのだと思い、嬉しかった。そして、お客さんの中には桜木さんもいらっしゃった。本番が終わった後、もう一度桜木さんから話を聞くことができた。

「世界中の笑顔と未来のために私たちができることは何か考えてみてください。」

何ができるだろう。今まで私はユニセフ募金しか思いつかなかった。しかし、桜木奈央子さんという方に出会い、できることはないか真剣に考えることができた。ウガンダのこと、自分たちが恵まれていることを知る。手紙でウガンダの人とつながることもできるのだ。

今の私たちにできることはこのようなことしかないが、大人になれば桜木さんのように活動することもできる。国境を越え、ウガンダの人とつながりたい。その夢を諦めずに、自分にできることはないか考えていきたい。

会長賞

言葉のすばらしさ

東京学芸大学附属小金井中学校　二年
大川彩希

「山峡の　町の土蔵の　うすうすと
　夕もやに暮れ　われらもだせり」

皆さんは、この短歌を知っているだろうか。この短歌は、私が国語の学習で習った短歌なのである。

私の中学校では、五月の下旬に、二年生が埼玉県の秩父長瀞へ修学旅行に行くことになっている。その際、国語では「宮沢賢治が詠んだ短歌」について学習をする。

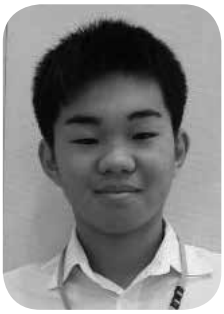
「宮沢賢治」といえば、何を思い浮かべるだろう。「注文の多い料理店」や「セロ弾きのゴーシュ」などの物語だろうか。実は、宮沢賢治は、盛岡高等農林学校に行き、大正五年には、秩父長瀞の地で岩石採集をしていたのだ。そのときに、宮沢賢治はたくさんの短歌を詠んだ。それらの短歌は、どれもこれもがすばらしい短歌ばかりだ。しかし、宮沢賢治は、これらの短歌を、学校に戻った後手直ししている。この「手直し」を行った理由を、実際に秩父長瀞の地を訪ね、考えるというのが、この修学旅行での国語の学習なのだ。

宮沢賢治が詠んだ短歌のうち、私が一番好きな歌は、最初に書いた「山峡の…」の歌だ。もとは、この歌は「山かひの　町の土蔵の　うすうすと　夕もやにくれ　われら歌へり」というものだった。この歌は、蓑山に登った宮沢賢治が、少しもやにかくされた秩父の景色を見て詠んだものである。そこで、私達は、この歌が詠まれた蓑山から秩父の景色を見ることにした。その日は、天候が良いとはいえず、宮沢賢治と同じような、少しぼんやりとした景色を見ることとなった。私は、その景色を見て、はっきりとした景色だけではなく、ぼんやりとした景色も幻想的で美しいと感じた。しばらく、その場で見入っていたほどだ。こんな幻想的な雰囲気だったからこそ、宮沢賢治は「歌う」から「もだす（黙す）」に短歌の表現を変えたのではないだろうか。そのくらい美しい景色だった。

さて、これまで宮沢賢治の短歌について書いてきた。この中で私が伝えたかったことは、「言葉はすばらしいものだ」ということだ。私は蓑山に登り、少しぼんやりとした景色を見て美しいと感じた。これだけなら、ただの私の感想である。しかし、宮沢賢治の「山峡の…」の歌があることで、「このぼんやりとした景色は今も昔も変わっていない」こと、また、「その景色を見た人が感じることも今と昔で変わっていないこと」をしることができる。このように、「今と昔で変わっていないこと」を知るてがかりとして「言葉」は大いに役立つ。言葉があるからこそ、昔の人の考えは今の人へと伝わる。そう考えると、言葉は時間を越える架け橋のような存在だと思った。

そんな「言葉」だが、最近、「言葉はしゃべれるのだから、国語の授業はいらない」という人がいる。果たして本当にそうだろうか。私はそうは思わない。皆さんは、言葉がなかったときのことを想像したことがあるだろうか。言葉は、自分と他人とのコミュニケーションの手段となる。それはすなわち、「言葉がなければコミュニケーションがとれず、一人で生きていくことになる」ことを意味している。皆さんは一人で生きていくことをどう思うだろう。他の人から学ぶこともなく、きっと、とてもつまらないと思うのではないだろうか。だから、「言葉」や「国語の学習」を、「いらない」なんて簡単に言わないでほしいと私は思う。「国語の学習」は、私達に言葉をうまく使えるようにする術を与えてくれている。そして、「言葉」は、私達に互いに助け合って生きていく権利を与えてくれている。こんなに大切な「言葉」だからこそ、「言葉なんか」と言わないでほしい。もっと言葉が与えてくれているものに目を向け、言葉のすばらしさに気が付いてほしい。そうすれば、今より多くのことを学べるようになると思うのに。

会長賞



いじめを減らすためには

立正大学付属立正中学校　三年
杉野（すぎの）太一（たいち）

僕は小学校四年生の秋まで父の実家のある自然の多い環境で住んでいました。そこで僕が体験したことです。三年生のころ、僕の友達のK君が、同級生のA君の靴を隠したり、からかったり、荷物を持たせたりなどをしていることがよくありました。もともとA君とは仲良くなかったですし、ただ、家が近いというだけで、最初はあまり気にしていませんでしたが、A君のことを「なんだかかわいそう。」と思うようになりました。

ある日僕は勇気を出して先生に「A君がいじめにあっています。」と報告しました。始め先生は、「じゃれ合っているだけだろう。」と、「いじめ」とは思ってくれませんでした。でもその後「いじめ」とわかり、K君は、先生に注意され、その日一日は反省した様子で過ごしていました。しかし次の日学校に行くと、いじめは前以上にエスカレートしていて、蹴ったりなぐったりするようになりました。しかも、「死ね」「うざい」「きもい」「馬鹿」「あほ」などの言葉が飛び交うようになり、そんな日々が続きました。さらに、それに便乗したK君の友達が言うようになりました。

それは四年生になっても続きました。僕はそのいじめを止めることができず、毎日、見て見ぬふりをしていました。今思うと、とても恥ずかしく、情けなく感じます。しかしその時の自分には止める勇気もなく、ただただ傍観者になっていました。またそれだけではなく、いじめられているA君に声一つかけることができずにいました。心の中ではK君に「やめろよ。」と言おうと思ったけど、なぜか勇気が出ませんでした。次にいじめられるのが自分になるんじゃないかという恐怖心で言えなかったのです。

そんな日々が続く中、僕の気持ちを大きく変える出来事がありました。それは、ひいおばあちゃんの死です。そのときのことは、あまりにも悲しすぎて、今でも鮮明に、覚えています。聞いたときには、頭の中が真っ白になりました。最初は信じることができませんでした。あんなに優しかった、ぬくもりなどをもう感じられないと思うと、一週間も二週間も学校に行けず、ただ、ぼーっと過ごしていました。いろんなことを思い出し、考えて、徐々に、「死」というものの悲しさ、つらさ、「死」という意味の重さが分かってきました。そして、時間はかかりましたが、「命は一瞬にして消え二度と戻ってこないんだな。」と思いました。「だから命を大切に、今を大切にしなければならない。」と深く受け止めることができるようになりました。そして、周りの子たちは、僕のような経験がないから「死ね」とか、軽々しく言えるのだろうと思い、この気持ちを伝えなくてはならないと考えました。僕が強くならなくてはならないと決心しました。

こんな気持ちになったとき僕には時間がありませんでした。父の転勤で神奈川への引っ越しが一週間後に決まっていたのです。落ち込んでいる暇はないと思い、学校に行った僕はK君に言いました。「いじめなんかやめろよ。いじめたって喜ぶ人はいないし、悲しむ人が増えるだけだろ。自分だって本当は嫌だろ。「死ね」とか「消えろ」とか言葉の重さも知らないのに、軽々しく言うなよ。」と言いました。ひいおばあちゃんの突然の死、そのあと僕が考えたことも伝えました。

友だちは、黙って聞いてくれました。僕の言葉にうなずいて、そのあとA君のところへ行き謝りました。

今も時々耳にする暴言。冗談半分で言っているのかもしれません。しかし、いついじめに発展するかは分かりません。他人を傷つけることで自分のストレスを晴らそうとしているのでしょう。そのとき一番大切な人の「死」を思い出してください。そうすることによっていじめは減らせると思います。

会長賞

本当の優しい心

立川市立立川第二中学校　二年
常盤（ときわ）　奏（かなで）

「もう充分だよ。今までありがとう。」

これが病気と闘っていた祖父の最後の言葉だった。その日の夕方、祖父の容態は急変し息を引き取った。その知らせを聞き、私は大急ぎで祖父の元へ向かった。神戸へ向かう新幹線の中で私は祖父の事、そして今まで起こった出来事を考え、そこには沢山の思いやりや優しさがあったことに気付き、涙が溢れ出てきた。

祖父は病気で一昨年の秋から入院していた。珍しい病気で治すのは難しいと担当医から言われていた。それでも祖父は必死に痛みに耐えて頑張っていた。そんな祖父をずっと隣で祖母が優しく見守っていた。母も月に数回は祖父母がいる神戸へ行って祖父の世話をし、心細い気持ちでいる祖母をなぐさめていた。母はいつも、

「仕事で神戸に行ってくるね。」

と言って出かけた。私と妹の事を思いやり、心配させないようにしたのだ。「優しさ」とは相手に対する「思いやり」や「いたわり」の気持ちから生まれてくることだと思う。

冬休みになり、私達も車で祖父の入院する病院に向かった。祖父はとてもやせ細り、辛そうだったが私達が来ると手を振ってくれた。その日から毎日、私は祖父のいる病院へ行き、学校での出来事を話すなどして一緒に過ごした。東京に帰ってからは祖父に手紙を書いて励ました。

ある休日、私達は祖父が退院して家で治療する事になったと聞いた。私は祖父が回復したのだと思い神戸の家へ向かった。しかし、私の思いとは裏腹に祖父はずっとベッドにいた。祖母は一日中祖父の隣に座り、痛がっている所をさすったり、毎日あった出来事や一緒に過ごした昔の思い出を話しかけていた。私が帰る日、「また来るね。」と祖父の手を握った。でもこれが最後だった。

そしてお葬式の日、色々な人が来て大人も子供も全員泣いていた。祖父はとても優しい人柄で、自分の事よりも周りの人への思いやりや感謝の気持ちを忘れない人だった。ここにいる人達は皆、祖父の優しさに助けられたのだろう。祖母は祖父に、

「四十二年間ありがとう。とても幸せでした。」

とお別れの言葉を言った。祖母も祖父の優しさを一番近くで感じ、その気持ちを大切に思い、心から感謝していたからこそ出てきた言葉だと思う。

心配かけないように頑張る優しさ、辛い夫のそばに寄り添う優しさ、辛い祖父母を慰める優しさ、いろんな事を秘密にして心配かけないようにする優しさ。世の中は色々な優しさで溢れている。しかしその反面、毎日のように悲しい事件が起きているのも事実だ。きっと事件の瞬間、その場に優しい心がなかったのだろう。人が人を思いやり、いたわり、尊敬しその気持ちに気付き感謝する。皆さんも周りの人から思いやりの気持ちを受け取った時、心が温かくなった事はないでしょうか。そんな時、何故か心が優しくなった経験はないでしょうか。それが本当の優しい心だと思う。人が人を思いやり、相手と心が通じた時に「本当の優しい心」が芽生えてくるのだと私は思う。

祖母は祖父を思いやり、今日も祖父のいる仏壇に向かって毎日の出来事を話しかけている。そして、まるで祖父がしていたように周りの人の事を思いやり、感謝し、「本当の優しい心」を持ち続けている。

私も「本当の優しい心」を決して忘れず生きてゆきたい。

会長賞

いつも感謝の気持ちを

武蔵野女子学院中学校　三年
廣瀬加奈（ひろせかな）

私は小さい頃から将来の夢がありませんでした。私が幼稚園の時、私の周りの友達は、「お花屋さんになりたい。」とか、「パン屋さんになりたい。」と言っていたのを覚えています。

しかし、私には憧れていたり興味を持っていた職業が一つもありませんでした。それは、中学生になっても変わりませんでした。中学三年生に進級した時、そろそろ進路を考えなければいけない時期だという事に気が付きました。ただ私は、就きたい職業が見つかっていない為、将来の予想などできる訳もなく、当然進路は決められません。そんな時に、学校の海外研修という行事があり、海外へ一週間勉強しに行きました。そこでは中学三年間勉強してきた英語を使う良い機会となりました。

訪ねて行った国はオーストラリアです。現地では、生まれて初めてのホームステイをしたり、地元の小学生と交流したりしました。海外では日本と文化が異なり、日本の常識は世界の非常識という言葉があるくらいの違いがありました。きっとこの機会が無かったら、これらの文化を知る事はありませんでした。その時、もっと色々な国の文化に触れてみたいと思いました。加えて異文化と交流する為の道具となる英語をもっと勉強したいとも思いました。そして、私の将来の夢に繋がるかもしれない興味がある職業を見つける事ができました。その職業は通訳です。英語を勉強して話せるようになったら、英語以外の言語も勉強して英語圏外のたくさんの人や文化に触れてみたいと思うようになりました。ただ、現地の人や他国の文化に触れ、その文化について知識を得るというのは、言葉が話せるだけではできない事だと私は考えています。

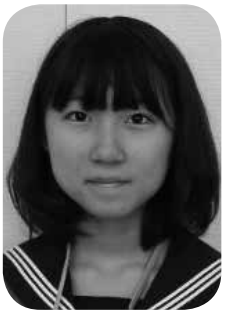
言葉が話せること以外に何が必要か。それは、感謝の気持ちだと考えています。よく言われる事だとは思いますが、一度で良いので考えてみてほしいです。あなたがいつも学校に通えているのは、誰のおかげでしょうか。学校で勉強できているのは、誰のおかげでしょうか。今、あなたは誰のどのような行動によってここで生きているのか。よく考えてみてください。自分一人だけという事は無いはずです。

人は一人では生きていけません。他の人の支えや協力によって生きています。それに対しての感謝の気持ちが大切だという事は理解している人が多いと思いますが、普段の生活の中ではどうしても忘れてしまう事なので、思い返す事が必要です。私がホームステイをした先のホストファミリーには、何回ありがとうと言っても足りないくらい感謝しています。

けれども、海外研修でお世話になったのはホストファミリーだけではありません。英語の勉強を教えてくださった先生方や、支えてくれた家族やガイドさん、現地の小学生、他にもいろんな人の支えがあって私達は様々な経験をしたり、生活したりすることができました。そして、これらの感謝は思っているだけでなく、口に出さなければ伝わりません。ですから、感謝の気持ちを言葉にする事も大切です。

もし私が通訳になったら、色々な国の感謝の言葉を覚えてから言語を勉強したいです。今の私の為にも未来の私の為にも、日々自分が今ここに居る事や生活できている事を、それを支えてくれている人たちに感謝して将来就きたいと思った職業に向けていろいろ勉強したいです。勉強する事ができる環境に居るという事に感謝しながら。

会長賞



祖父からのメッセージ

東京学芸大学附属小金井中学校　二年
宮崎（みやざき）　秋（しゅう）

私がゴミ屋敷のような祖父の部屋に足を踏み入れたのは、祖父が亡くなってしばらく経った頃だった。母に、祖父の遺品の整理を手伝ってほしいと言われたからだ。しかし正直あまり気が進まなかった。自分のことで忙しかったし、祖父のことはすっかり忘れていたからだ。

私は生まれたときから祖父母と一緒に暮らしてきた。両親が働いているので、小さい頃祖父にはよく可愛がってもらった。欲しいものがあると大抵は買ってくれた。しかし、そんな祖父は三年前に亡くなった。祖父の部屋ってどんなだったろうと考えてみると、思い出せない。そういえば、祖父は人を部屋に入れるのを嫌がっていた。今となっては、何となくわかるような気がする。

入ったことのなかったその部屋を、初めてちゃんとながめてみた。そこは、足の踏み場もないくらいモノであふれかえっていて、呆然としてしまった。母も同じような様子であった。あまり良い言い方ではないが、その部屋はまさしくゴミ屋敷だと思った。

そんなとき、大量に積んであった箱の一つ一つに、マジックで何か書いてあるのを母が見つけた。懐かしい祖父の字であった。そしてそれらは、決してゴミではないことに気づいた。

ある箱には、「はりがね」と書いてあった。おそるおそる開けてみると、パンの袋などを留めるときに使う、針金にビニルテープが巻いてあるものが大量に入っていた。私は驚きで言葉が出なかった。でもこれはまだ序の口だった。

二つ目の箱には、「文房具」と書かれていた。中には母が捨てたはずの、昔のものさしやコンパス、使いかけの消しゴムがたくさん入っていた。それらには昔のアニメのキャラクターや、アイドルの写真のシールが貼ってあった。色あせてはいるが、どれもまだ使えるものばかりだ。他にもスーパーのレジ袋が、きれいにたたんで大量に入っている箱もあった。

一番私が驚いた箱には、「紙」と書いてあり、中には新聞についてくる広告の裏紙が大量に入っていた。もうそれは一枚一枚がうす茶色になっていて、何も書けそうにない紙ばかりであった。私には真っ白な画用紙をいつも買ってくれていたのに、祖父は毎日こんな紙を使っていたのだろうか。そう思うと涙が止まらなかった。

祖父は戦争中、幼少期を過ごした。戦争が激しくなり、学童疎開を経験して、食べるものが何もなく草を食べていたと言っていた。そんな祖父だからこそ私に、モノを大切にしなくてはいけないという、あたり前のことを教えたかったのだろう。だからあえて、私がいつか見つけるだろうたくさんの箱を残したのだと思う。祖父のことを忘れていた自分、そして祖父の部屋をゴミ屋敷と思ってしまった自分を恥じた。

今、私たちが生きている世の中はモノであふれかえっている。百円均一ショップでも、色とりどりで魅力的なモノがたくさん売っている。私たちはそれらを気軽にどんどん買っている気がする。しかし、モノはあふれているが心は満たされているのだろうか？私たちはモノを買うという行動だけに満足しているような気がする。

周りを見渡してみよう。はさみだってペンだって、家中あふれていないだろうか？満たされない心をモノで埋めてはいないだろうか。

私は最近欲しいモノがあるとき、真っ先にあの箱を思い出して、「これは本当に必要か？」と少し立ち止まるようにしている。祖父が亡くなってから、あの箱が教えてくれたことだ。

平和になった世の中ではあるが、祖父の生きた時代、モノもなくて、草を食べていたときがあったのだということを、決して忘れてはいけない。そんな祖父のメッセージは、私の心の中で生き続ける。

会長賞

努力は格好いい

東京都立立川国際中等教育学校　一年
村岡　菜々

何か苦手なことを克服するために努力したことはありますか。また、努力している人を見たことはありますか。

私は小学四年生の時、算数が苦手でした。四年生になり急に難しくなり、図形の単元なんか、先生の言っていることが全く理解できませんでした。でも私は苦手を克服しようとせず、いつも笑ってごまかしていました。なぜなら、できないのに頑張る事が恥ずかしいことだと思っていたからです。

夏休みが終わり、二学期が始まった頃、休み明けのテストがありました。私の成績は休み前と変わりません。しかし、周りの友達はちがいました。休み前、私と同じで算数が苦手だった子が私の二倍程の点数を取っていました。その子はとても達成感に満ちた表情を浮かべていました。私は家に帰って母にその話をしました。話していると悔しさなど、色々な感情が込み上げてきて、またいつものように「やってもできないなら、やんないほうがマシでしょ。」と、笑ってごまかそうとしました。すると母が「やる前からあきらめるのが一番格好悪いよね。」と言いました。私は心が痛くなりました。友人の満足感にあふれた顔を見たときから、何となく自覚していたからだと思います。私は今までの自分をふり返りました。自分は何か努力をしたか、堂々と格好いいと言えるようなことをしたか、色々考えました。でも、浮かんでくるのは、友人がコツコツ努力をする横で「どうせ無理。」とヘラヘラ笑ってごまかしている自分の格好悪い姿でした。

この日から私は物事に対する態度を改めました。苦手な算数を克服するためにほとんど毎日塾に行って、分からない問題は分かるまでしつこいくらいに、先生に質問しました。塾の友達からは「急にどうしたの？」とか笑われたり、「やっても無理だとか言ってたじゃん」と馬鹿にされることもありました。思うような結果が出ず、悔し泣きする事もありました。それでも私は頑張り続けました。努力するほうが、あきらめるより何倍も格好よく、何倍も価値があるということが分かっていたからです。

五年生になって私は自分でも分かるほど、変化したことがありました。それは自分に自信を持つことが少しできるようになったことです。授業中、自ら発言してみたり、やったことのないことにチャレンジしたりできるようになったのです。今、考えてみるとこれは、努力のおかげなのではと思います。何か、努力することで、「自分は頑張れる。」「やればできる。」と気づき、自信がついたのかもしれません。実際、五年生に上がってから努力の成果がでてきたのか、少しずつ成績が上がっていて、何に対しても積極的になっていたのを今でも覚えています。

そして、六年生の夏休み明けテスト。私はこのテストの算数でクラス一位をとりました。先生たちも友達も驚いていました。私はとてもうれしかったです。一位がうれしいのではなく、二年間の努力が報われたのがとても、うれしかったです。この喜びは今でも記憶にはっきり残っています。

このことから私は努力することの素晴らしさを主張したいです。頑張る人を見て笑っている人たちはとても格好悪いです。努力することを格好悪いと思っている人たちは近くの頑張っている人たちを見てみてください。自分の方が何倍も格好悪いと気がつくはずです。私は小学校の時学んだ努力の素晴らしさを忘れずに、自信をもって色々なことにチャレンジしていきたい。そして自分の未来の選択肢を広げていきたい。

会長賞

便利さの檻

東京都立立川国際中等教育学校　一年
渡辺結心

スマートフォン。それは、世界中の人々の大半は持つ、とても便利な携帯電話です。私も持っていますが、その便利さは日々実感しています。スマートフォンでは、簡単に友達とやり取りが出来たり、面白いゲームが出来たり、きれいでとても鮮明な写真が撮れたり出来ます。こう考えてみると、スマートフォンの良いところは沢山あることに気がつきます。しかし私は、その便利さの裏には、便利が生み出した不便さがひそんでいると考えているのです。

私は、ほぼ毎日スマートフォンを使っています。インターネットを使って調べ物をしたり、親や友達と連絡を取り合ったりもしますが、大体はゲームをしてしまうことが多いです。それがなかなかやめられずに、やらなければいけないことを後回しにして、時間がかかってしまったり、焦って忘れ物をしてしまうことがあります。最近では視力も低下してきてしまいました。私はこのままではいけないと思い、一週間使わないことにしてみました。すると、スマートフォンの小さな画面では出来ないような楽しいことが、沢山あることに気がついたのです。

例えば、家族でショッピングに行くことも楽しくなります。今までは、お店に行ってもどこかに座って一人でスマートフォンを使って、時間をつぶしてしまいがちでした。しかし、使わないでみると、「これはどう?」「あれ良いね」などと楽しく話しながら買う物を選んだりできて、楽しさが増します。また、今まで後回しにしていた、宿題などのやることも早めに終わらせて、どこかに出かけたり、ゆっくりすることだって出来ます。

私は、これまでスマートフォンを使いすぎて、周りにあふれている沢山の楽しみに気づけていなかったことをとても後悔しました。確かにスマートフォンはとても便利ですが、その便利さにとらわれて、一日を楽しむチャンスを逃してしまっているのです。そのことに気づき、少しでも意識することが大切なのではないでしょうか。

私がこのように思った理由はもう一つあります。私の友達にゲームが好きな人がいて、その人も以前の私と同じように、片時もスマートフォンを手放しません。前は自分も同じだったので、あまり気にはとめていませんでしたが、意識するようになってからは、話しかけてもあいまいな答えばかりで、いつも下を向いている友達を見て、少し不愉快でいらいらしたり、「もっと楽しいことがあるのに」と悲しくなったりするようになりました。実際、自分がやっている側だと周りからの視線にはあまり気づきませんが、周りの人の立場に立って見ると、こんな風に見えているんだと実感しました。

便利という檻の中にとらわれ、そこから出ることができずに、周りが見えなくなってしまっている人が、世界には沢山います。その中で楽しむことができても、考え方や自分の世界が狭くなるし、たとえその中で友達ができたとしても、それはただの平面上の、薄い関係でしかないのです。また、そればかりに集中してしまい、人との接し方が分からなくなってしまう、コミュニケーション障害や、ブルーライトによって視力が低下してしまうこともあるのです。私はこのような、平面的で、狭く暗い世界ではなく、人と顔を見ながら話し、沢山の楽しさを見つけ、上を向いて生きられる、立体的で実のある人生にしたいです。

審査員特別賞

ごみのポイ捨ての現状

武蔵野女子学院中学校　三年
勝島（かつしま）　由依（ゆい）

私は、どう考えてもごみのポイ捨ての正当化はできないと思う。なぜなら、その捨てた本人に直接影響はなくても、周りの環境や人への迷惑になり得ると思うからだ。

今までに私は、タバコなどをポイ捨てしている大人を何人も見かけた。その人達を見るといつも、何のためらいもなく捨てていて罪の意識がないように感じる。私だったらとても罪悪感を感じると思う。ポイ捨てをしてしまう人的要因は二つある。一つは少しくらい捨てても大丈夫だろうという安易な気持ち。二つ目は、みんな捨てているから私も捨てていいかなと思う心理だ。私は以前、友達と公園でお菓子を食べている時にその友達がお菓子の袋を目立たない所に捨てたという場面に立ち会ったことがある。私はその子に注意をしたが、「少しくらい大丈夫。」と言ってそのままにしてしまった。ポイ捨てをする人はそれを片付ける人の気持ちが分かっていない。実際にそのごみを片付けるのはボランティアの方などの会ったこともない他人だ。自分が捨てたごみなのに他人が片付けるのはおかしいと思うし、その人達はとても迷惑だろう。

また、もしポイ捨てされた場所が山林や国道だったら国がそのごみを片付けることになる。つまり、私達が出している「税金」が使われる。その税金は年間約二千億円にものぼるそうだ。

さらに、路上に捨てられたごみは自然に帰るわけではないので環境にも良くない。例えば、川の中にごみを捨てるとその下にいる魚に影響を与えるし、悪臭が発生してしまう。

このように、ごみを捨てることは様々なデメリットがあり、ポイ捨てをしてはいけないことは明らかだ。

一方で、捨てられているごみは掃除しても毎日出てくる。このような現状に対策をしている県や自治体は多く、ごみ箱を増やしたり掃除する人をボランティアではなく雇用したりしているという。また、ポスターや看板を設置して呼びかけている所もある。しかし、ポイ捨てをする人自身がやってはいけないと自覚しなければ効果がないと思う。そこで私は、ポイ捨てをしたら罰金をとるのが一番いいと思う。そうすることで今後はごみをポイ捨てしないようになると思うからだ。

一方でごみをポイ捨てして罰金をとることに反対という人もいると思う。それは、ごみをポイ捨てしただけで罰金をとるのは厳しいと考えるからだと思う。確かに、タバコ一つ捨てただけで罰金を課されたら厳しいと思う人は沢山いるだろう。しかし、そういって何も対策を考えずにいると、ごみをポイ捨てする人は減らないと思う。

このように、少しの意識でポイ捨て問題は解決できると思う。タバコを捨てたいなら携帯灰皿を持ち歩いたり、自分でごみ袋を持参しそこに捨てるようにするなど、個人の意識で改善できると思うので、国の対策も必要ではあるが、私達自身でもこの問題について考えることが必要だと思う。このままごみを捨て続けると、「ちりも積もれば山となる。」という言葉があるように町がごみであふれてしまい、手遅れになってしまうかもしれない。このポイ捨て問題は仕方なく罰金などを課すしかないほど重要で深刻な問題なので国民全員が真剣に考えてほしいと思う。ごみをポイ捨てするということは自分達で町を汚くすることになるし、周りの環境や人への迷惑が必ずついてくる。よって、私はごみのポイ捨ての正当化はどう考えてもできないと思う。

審査員特別賞

私の進む道

世田谷区立東深沢中学校　三年
鷹林（たかばやし）　涼子（りょうこ）

私は演劇が好きです。私が初めて演劇の世界に引きこまれた作品、それは劇団四季の「ライオンキング」でした。七年前演劇を見るのが初めてだった私は、人の手で動かしている動物、役者の歌声、表情その全てに心をわしづかみにされました。体中の毛が逆立つとは、このことをいうのだと実感しました。その日から私は演劇が大好きになっていきました。様々な作品を鑑賞していく中で、役者の何とも言えない感情表現、会場中を引き込む芝居の熱気に魅せられていきました。もし私が役者だったら演劇を通じて味わったドキドキやワクワクを伝えられるような、観た人の視線が釘付けになり心をつかんで離さない、そんな芝居をしてみたいと強く感じていました。そして、劇団探しを実行したのです。しかし、現実に目を向けると足には障害があり、ダンスやストレッチができない私を受け入れてくれる場所は見つかりませんでした。こんなにも表現することが好きになれたのに、なぜ障害というハンデに夢を邪魔されなくてはならないのでしょうか。悩みました。

そこで実際に障害をもっていたり、車いす生活をしたりしている役者さんがいないかと調べることにしました。自分の夢や目標に少しでも近づく希望になればと思ったからです。すると、一人の役者にたどり着きました。アメリカ出身のクリストファ・リーヴ氏。彼は一九七八年から始まった大ヒット映画「スーパーマンシリーズ」で、四作品連続主演を務めました。その後、乗馬中に落下し首から下が麻痺、一時は寝たきりの生活を余儀なくされました。彼が感じた絶望は計り知れないものだったでしょう。しかし、家族の支えもあり彼は前を向き進み始めるのです。長い間、懸命なリハビリ生活を続け、車いす生活ができるまでに回復しました。すると、一九九七年には優秀な映像作品に贈られるエミー賞を、二年後には優秀な音楽作品に贈られるグラミー賞を受賞し、見事な復活を果たしました。また、「裏窓」というドラマで「自分にしかできない役」だと、四肢が麻痺した主人公を演じました。彼はこのような劇的な復活を果たすまで、リハビリを止めなかったそうです。以前のように動けるようになることを信じて。

調べながら、私は彼のようにはなれないと感じました。きっと彼には、「もう一度役者に戻りたい」という強い信念があったからこそ、ここまで成し遂げられたのだと思います。現実を目の当たりにしてすぐに諦めてしまう私にはできないことです。しかし、今回調べてみて確信したことがあります。

人のせい環境のせいにして一歩も踏み出さないことを嘆くより、精一杯の努力で少しでも前に進む方が、人生は楽しいということです。なぜなら、周りからの協力も無く、自分で努力を重ねていなければ、一生寝たきりで気持ちも弱くなり、彼の症状はもっと重くなっていたのではないかと考えたからです。復帰後、クリストファ・リーヴ氏は「ヒーローとは何か？」というインタビューに対してこう答えています。

「どんな障害に遭っても努力を惜しまず、耐え抜く強さを身に付けていったごく普通の人」

現在、私は演劇を通して感じた話を自分から打ち明けることで、周りの人の悩みを聞く機会が多くなりました。皆から「相談しやすい」と言ってもらえることに喜びを感じています。そして、話をしてくれた相手の心が少しでも安らげるような「臨床心理士」になるという、新たな目標を揚げました。

リーヴ氏の言葉にあるように、この先進む道がどんなものであったとしても努力を惜しまず、強い心をもった「私」になっていきたいと思います。

人生という舞台で「私」を精一杯表現していく、自分の物語の主役は「私」しかいないのだから。

審査員特別賞

架け橋になろう

國學院大學久我山中学校　三年
田中結子

一際目立つ背の高さ、美しいブロンドの髪、澄んだ青い目、周りを見ればどこもかしこも外国人。耳を澄ませば、英語・中国語・どこの国の言語か分からない言葉が聞こえて来る。日本には今、多くの外国人が観光などを目的にやって来る。日本の文化は神道、アニメーションのように外国人を魅了するものばかりだ。「おもてなし」精神もその一つであると言えるだろう。そんな中で日本では外国人が過ごしやすいよう、またグローバルにするためにたくさんの工夫をしている。しかし、それは本当に大切なのだろうか。Ｆｒｅｅ-ｗｉｆｉを完備すること、外国人向けの建物を造ることが、日本と世界をつなぐ架け橋なのだろうか。

どんな人でも、他国に足を運ぶこと、異文化を体験することは、不安な事であるだろう。日本に来る外国人もそうである。東京駅や新宿駅には見たことのないほど、路線があって途方に暮れる外国人も少なくない。そんな外国人を見かけた時、私達は何ができるのだろう。声を掛けられるだろうか。助けてあげられるだろうか。一歩、踏み出せるだろうか。以前、こんな事があった。友達と四人でディズニーランドに行って、アトラクションに並んでいた時、前に並んでいた体格の大きい外国人が大きな声でいきなり後ろの列に向かって、「Ｗｈｏ　ｃａｎ　ｓｐｅａｋ　Ｅｎｇｌｉｓｈ？」と尋ねてきたのだ。その時、私達日本人、全員が時が止まったかのように固まってしまった。結局、誰も名乗り出ず、その外国人も諦めてしまった。本当に異様な光景だった。絶対に静かにならない夢の国で、全員が静まり返ったのだから。その後、その外国人を見ていると家族で何やらマップを見て話していた。きっと場所か何かが分からなかったのかもしれない。すると、私はあることに気付いてしまった。その家族は英語ではない他の全く知らない言語で会話していたのだ。本当に驚いた。しかし、それ以上に後悔もした。同じ英語を母国語としない人が必死に勇気を出し、助けを求めてきたのに自分は何もできなかった。否、違う。何もしなかったのだ。それはきっと、体の大きい外国人に圧倒されてしまったからかもしれない。しかし、日々恵まれた環境で英語を勉強していて、少しは英語で会話することができたのにチャレンジすることを恐れ黙ってうつむいてしまった自分はなんて情けないのだろう。勇気を出せなかった自分に自責の念を感じた。

しかし、こういった経験をしたことがあるのは私だけでないと思う。ある時、多くの外国人と触れ合う機会があり、一人の外国人がこんな事を言ってきた。「日本人は英語を話せない人が多いわ。」と。私はその時、確信した。日本人は話せないのではなく、話さないのだと。それはきっと日本人が世界と比べて内向的であるからだと思う。自分から話しかけても上手に伝えられる自信がない、聞き返されたらどうしようと不安だけが先走ってはないだろうか？私もそうである。怖くて怖くてしょうがない。まるで未知の世界に足を踏み入れるように。けれども、相手だってこちらが何かしらの言葉を掛け、手助けするだけで安心するだろう。相手だって未知の世界にいるのだから。お互いに助け合うことで、初めて、理解し合えるのだと思う。

二〇二〇年、東京オリンピック。日本には何百万、何千万もの外国人が訪れる。そのために、今私達がすべきことは何だろう。Ｆｒｅｅ-ｗｉｆｉの完備でもなく、外国人向けの建物を造ることでもなく、架け橋に私達自身がなることではないだろうか。さあ、自分の持っている力を信じて、一歩踏み出してみようではないか。周りには自分を必要とする人がいるだろう。そして、勇気を出した先には自分を成長させてくれる宝物がきっとあるはずだ。

審査員特別賞

好きなものを好きと言う

東京都立桜修館中等教育学校　三年
趙（ちょう）　浩慶（ほぎょん）

もし他人から「好きなものは何か」と問われることがあれば、私は間違いなくあるマンガとそれを原作とするアニメの名を答えるだろう。

辞書で「オタク」という言葉を引いてみると、「ある特定の分野やものごとに熱中すること、またその人」とある。私はこの世間でいうオタクに分類される人間だ。好きなアニメキャラクターのことを夢中で調べるのはもちろん、アニメグッズの専門店に何度も足を運んでいる。これは私にとって最も充実した楽しい時間である。

しかし、現在の日本社会ではアニメやマンガはあまり良いイメージがなく、むしろ疎まれることが多い。同様にオタクも多くの人々は悪いものとしてとらえている。アニメ先進国と呼ばれ、サブカルチャー大国であるこの国でのことだ。

どうしてオタクは否定の対象になるのだろう。人はよく好きなものがあることは良いことだという。それではなぜ、アニメが好きではいけないのだろうか。

確かに、アニメばかり見て他のことが手につかなくなる、などといった一般的な懸念も理解できる。しかし、全ての人がアニメによってそうなるわけではない。現に私は勉強、部活動など学生としてやるべきことを全てきちんとこなしながらもアニメやマンガを好む人を何人も知っている。反対に趣味をもっているからこそ、それを目的として毎日を楽しんで生きて行けるのではないだろうか。

アニメをきっかけに、新たなことに興味をもち、様々な知識に触れることもできる。好きなあのキャラクターのようにピアノを弾けるようになりたい。キャラクターの読んでいたあの本を自分も読んでみたい。可能性は無限大だ。そしてこれは人の進む道にもつながる。

現在、日本のアニメ業界は拡大、発展をつづけている。この十数年で一年間に放映される作品数はおよそ二倍になった。国外からの人気も高く、アニメ文化はもはや日本を代表すると言っても過言ではない。昨年度の年間映画興業収入トップテンのうち、半分以上を占めるのがアニメ作品だ。このように盛んな分野であるのにもかかわらず、否定的な意見が多いのも皮肉なことではないか。むろん全てを肯定してくれと強要するつもりはない。ただ、私が言いたいのは価値観を否定することなく「こういうのが好きな人もいる」と理解をしてほしい、それだけだ。

これから先、アニメは日本の国を形づくり文化の中心として支えていく重要なものになるに違いない。世界とつながっていく橋になるかも知れない。

人はだれもが好きなものや憧れるものを持っている。それはアーティストであったり、芸能人であったり、これまで語ってきたアニメだったりする。誰だって好きなものを否定されればいやな気持ちになる。そもそもアニメが悪いものだと広がったのはなぜだろう。一度、植えつけられた先入観など全てとりはらって、こちらをのぞいて見てはくれないだろうか。その扉の先には、ただアニメを愛する人々の夢がつまっているだけなのだ。

審査員特別賞

傘を握りしめて

國學院大學久我山中学校　三年
中村健人

その日の空は午前の雨が嘘のように澄み渡っていた。授業は四限で終わり、そそくさと帰路についた僕は、バスに揺られていた。気付けば終点のアナウンス。簡単に支度を整え見慣れた駅を待つ。傘を握りしめて。バスが停まると席を立ち降車ドアへと向かう。いつもと何ら変わりない、慣れた動作のはずだった。けれどそこに一つの違和感を覚えた。自分の座っていた斜め前の席の手すりに寂しく佇む傘があった。

確かその席にはおじいさんが座っていた。帽子を被った、心優しそうな人だった。今から追いかければ、まだ間に合うかもしれない。でも、もし人違いだったら。見つけることができなかったら。どれだけ悩んだだろうか。実際はほんの数秒のことだったのかもしれない。葛藤の末、僕の手がその傘に触れることはなかった。

今でも、その時のことを思い出すことがある。なぜ、と自分を責める気持ちがある一方、正当化しようとしてしまう気持ちがあることも事実だ。今となってはどっちが正しかったのかは分からない。けれど必ずと言っていいほど最後には、そんな自分を恥ずかしく思う気持ちが追いかけてくる。

時は経ち、春になった。雨を予感させるどんよりとした曇り空の下、僕は朝のバスで眠気と戦っていた。意識がはっきりとしてくる頃には、車内は多くの人で混み合い、終点のアナウンスを今か今かと待ちわびる状況だった。足に力を入れ、左手に手すり、右手に傘を握りしめていると、やっとその声が聞こえた。バスが停まり、降車ドアへと向かう。嫌な予感がした。やはり傘はまた、そこにあった。その席には、ぴかぴかのランドセルを背負い、楽しそうに窓の外を眺めていた小学生とその母親が座っていたことが瞬時に思い起こされた。あれだけ人がいたのだ。誰かが、とも思ったが、皆急いでいるらしく気付く者はいなかった。急いでいるのは自分も同じだ。だけど、だけど僕は。あのおじいさんの顔が頭をよぎった。気付くと傘を持ち、親子を探していた。二人はドアのすぐそばにいた。声をかけ、傘を見せると、母親は笑顔を浮かべ、言った。

「ありがとうございます。」

ああ良かった。そんな思いで僕の胸は満たされた。たった一声かけるだけ。それだけのことを何をためらっていたのだろう。胸のもやは晴れた。

日本はよく、落とし物をしても、必ず返ってくる国と言われる。しかし、それらはすべて誰かの善意によって成り立っている。誰かの優しさで世界はできているのだ。自分もその中にやっと、入ることができたように思えた。

あのおじいさんの傘はどうなっただろうか。ちゃんと気付いて、バス会社に電話しただろうか。今はそう願うしかない。

その日から数週間が経った。珍しく座ることができた朝のバスも、もう少し寝ていたいという気持ちとは裏腹に着々と進み続ける。仕方なしに開いた目をこすり、何気なくバスの車内を見渡す。すると、一人の少年の姿が目に入った。あの時の小学生だった。その少年の手には大事そうに握りしめられた傘があった。

僕のとった行動はちっぽけなことだったかもしれない。それでも、誰か一人でも笑顔に出来たなら、それは立派な行動と呼んでいいのではないだろうか。周りの小さな優しさが誰かの大きな喜びになるかもしれない。涙より笑顔を多く見ることができるような人に、僕はなりたい。

審査員特別賞

気持ちを察する目と心

東京都立立川国際中等教育学校　一年
細川彩花

皆さんの周りにいつも笑顔の人はいますか。それは心からの笑顔でしょうか。また、暗い顔、悲しい顔をしている人はいますか。その人に、どうしたのと、声をかけたことはありますか。

私は友達との関わり方について、その時々の相手の気持ちや状況を考えて接するべきだと主張します。なぜなら、私が友達から相談を受けることがよくあり、色々な思いをしている人がいると気づいたからです。

小学生の時、私の友達から、友人関係で悩んでいると相談を受けました。仲の良い二人から避けられていると聞いた私は、なんとか解決しようと、彼女と友達の学校での様子を観察しました。すると彼女は、その二人と一緒に居ました。三人で何か話をしていて笑顔でしたが、彼女の笑顔は無理をしているようでした。彼女の笑顔は本当に花が咲くような明るいものなのですが、その時だけ無理矢理つくった笑顔でした。周りの人を見ると、その小さな違いに気づいている人はいませんでした。彼女が一人で居る時に、

「無理して一緒に居なくていいし、辛かったらいつでも私の所に来ていいからね。」

と、声をかけました。その後、彼女の友達と話し合い、解決して、彼女の本当の笑顔が見られるようになりました。彼女の気持ちに気づいてあげることが出来てよかったです。

また、私自身、友達に話を聞いてもらって心が軽くなった経験があります。

先日、期末テストがありました。その前の中間テストの時、数学の点数が良くなくてひどく落ち込んでしまいました。そのため、次の回こそは良い点数を取ろうと、たくさんの問題を解いて練習しました。かなり自信はあったものの、目標点に届かず、悔しい思いをしました。しかし、友達は皆、高い点数でした。

それから私は、友達は出来るのに何で自分は出来ないのだろうと思うようになり、ついには、私は必要ない人間だと思うまで追いつめられました。どうすればいいのか分からないまま、日々を過ごしていました。

そんな時、ある友達が無理して欲しくないから話してみなよと、声をかけてくれました。いつも話を聞く側の私は、初めて、話してごらんと言われて驚きましたが、話してみることにしました。学校でのこと、今の気持ちのことなど全て話しました。彼は最後まで話を聞いてくれました。すると、

「君がいなくなった後、困る人が絶対にいると思う。辛い時に考えるとマイナスな方にしかいかないから、あんまり考えてもだめだよ。まあ、無理しないでね。」

と言ってくれました。私はその言葉を聞いた瞬間、涙があふれてきました。誰にも話したことのないことを受け止めてくれるか不安でしたが、彼はちゃんと受け止めてくれました。それが一番嬉しかったです。

今でも彼の言葉を思い出すたび、涙が出てきます。彼は私という存在をしっかり認めてくれました。彼に話してみて、心がとても軽くなりました。彼には感謝しかありません。

この経験から、私も悩んでいる人の話を聞いて、助けてあげようと思いました。話すだけで心が軽くなるし、一緒に考えることで一人じゃないと思うことが出来ます。自分の辛いことや悲しいことを話すことは、相手に受け入れてもらえるか不安ですが、思い切って打ちあけることが大切なんだということにも気づきました。私もしっかり、思いを受け止めようと思います。

私は相手を思いやることの出来るクラス、学年にするために、一人一人の日々の様子を見て、表情や行動の変化があったら声をかけます。そこからどのような気持ちなのか察する目と心を持って相手に接していきます。また、今いる友達を大切に過ごしていきます。

審査員特別賞

私のモラトリアム期間

杉並区立向陽中学校　三年
松本志真

傘のかかっていない裸電球がひとつ、この部屋を照らしている。ここは母の実家の納戸。天井から三段に仕切られ、頑丈な棚に種々雑多な物たちが所狭しと並んでいる。窓もないのに息苦しくもなく、土壁のせいか一定の室温が保たれ心地良い。

大阪の都心より少し離れ、高層ビルの見当たらない寺町に母の実家がある。ここには、私にとって興味津々、魅力一杯の納戸がある。上段には、仏壇仏具、兜飾り、雛人形、羽織袴、掛け軸。中段下段には、陶器、銅器、真鍮の火鉢など。江戸、明治時代の生活用具が箱に入ったまま並んでいる。中でも大きな箱には、祖父が若い頃に使っていたらしい剣道防具一式が入っている。今、腰の曲がった祖父が面や防具で身仕度し、木刀を構えた姿はどうしても想像できない。時代を感じるこの古めかしい匂いは嫌いではなく、江戸、明治時代に自然と興味が湧いてくる。

母は幼い頃、急な来客にはとっさにこの納戸に隠れたらしい。勿論、客が帰るまで出られない。都合良く幼児用の椅子を置いていて、それに腰かけ、アルバムを見たり、おもちゃのブロックを組んだり、時にはウトウトしていたらしい。「心地良い隠れ納戸だった。」と今でも懐かしそうに話してくれる。

祖母から「短い休みなのに来てくれて、何をご馳走しようかな～。」と声がかかる。私は納戸から「何でもいいよ～、ゆっくりでいいで～す。」と返答。納戸の私は、さて今回はどの箱を開けようかと物色していると、ある箱の蓋の走り書きに目が止まった。

「のんきと見える人々も
　心の底をたたいてみると
　どこか悲しい音がする　漱石　ねこ」

後に小説の一節と知った。この文字にひかれ期待して箱を開けてみた。すると中身はまさかの「サザエさん」と「いじわるばあさん」の漫画本だった。パラパラめくってみると、何ともユーモラスで、「いじわるばあさん」と祖母が重なって、クスッと笑ってしまった。何冊かの漫画本の下に、何やら難解な数冊の古い本。「若者とアイデンティティ・モラトリアム人間の心理・モラトリアムの時代」など。「モラトリアム」って何だろう…。その時は深く考えずに漫画本に戻っていた。

初めて知ったこの言葉は、なぜか心にひっかかり、後日、私なりに調べてみた。語源は元々、「戦争・暴動・天災等、非常時において、債権の決算を延期し、金融恐慌による社会の崩壊を防止する措置の『猶予期間』を意味する。」とのこと。また、この言葉を転用して、「若者の青年期から社会人、大人になるまでの進路、職業の選択と、自分の生き方を自由に準備し、整える期間を指す。」とも説明されている。

実際に意味する期間には数年早いようだが、私もまさにこれから「モラトリアム期間」に入りつつあるのではないかと考えてみた。小学生の頃は、思い出すと赤面するような職業を、後先も考えず作文に書いたりしたものだ。しかし今は一体何の人になりたいのか、憧れだけを優先するのはどうなのか、自分自身の資質、個性も知り得ていない。大きな社会の仕組みも分かっていない。

例えば、毎日のニュースから世界に目を向けると、内戦が続くシリアなどでは、日本と同じ地球上の出来事と思えない程、悲惨な事件が繰り返されている。私が大人になった頃、皆が幸せに暮らしているのだろうか…。また日々進化する情報機器についていけるのだろうか…。考え出すと不安だらけだ。

そこで私は、知識と技能を持った社会人になるための準備、猶予の初期段階を「私のモラトリアム期間」と決めることにした。

将来、「こうでありたい、こう生きたい。」と希望するならば、今の環境を当たり前と思わず、全てに感謝しながら、心の土壌をしっかりと耕して、「私のモラトリアム期間」を大事に過ごしたい。

母の実家の納戸周辺は、変わることなく穏やかな時が流れ、古い物たちが私に考えたり反省したりと色々な事を教えてくれる。自分を信じ、自分の未来のために、「私のモラトリアム期間」、今より始めます。

審査員特別賞

日本の伝統、絶やさないように

東京都立桜修館中等教育学校　二年
水島　結

「違うのは当たり前なんだ。その違いを、自分の武器にしなさい。」以前、太鼓の教室の先生に、こう言われたことがある。私が、太鼓の音を上手く響かせられなくて悩んでいたときに、先生がくれたアドバイスだ。

そもそも太鼓を打つには、腕だけではなく、腹や背中にも筋力が必要になる。長い曲を打つなら、肺活量や体力も欠かせない。このような理由から、従来、女性の打ち手はあまりいなかった。

それでも私は太鼓が好きで、もう四、五年は打っているが、やはり体力や筋力は男性に劣る。女性の打ち手は、男性のように力強く重い音を出すのが難しいのだ。私は、つい最近この「差」という壁にぶつかった。その時に先生がくれたのがその言葉だ。「男性の打ち手と女性の打ち手じゃあ、当然男性の方が良い音が出せる。でも、女性の打ち手にしかできないこともあるんじゃないの。」そう言われた。言われて、その通りだと思った。もちろん、筋肉をつけることは大切だ。体力も、なくては太鼓を打つことができない。その中に、いかに自分なりの工夫を光らせるか。そういうことだと思う。

この言葉をもらって数日経ってから、私は先生からもう一つアドバイスを受けた。それは、このようなものだ。「君がした工夫は、後々、他の打ち手の役に立つかもしれない。だから、たくさん悩んでみて、それを絶やすことなく伝えてみなさい。」これを聞いて、とても心が温かくなった。女性の打ち手はまだ多くない。だから私は、その少数派の一員として、悩むべきことをしっかり悩もうと思えた。その悩みを解決できたら、次はその工夫を伝えていきたい。きっとこれが、「伝統」ということだと思う。「伝わってきたことを統べる」ということ。太鼓という文化の歴史には、それがたくさんある。楽譜はないし、バチの持ち方や打ち方を記した入門書みたいなものも、多くの場合は存在しない。全てが、言葉と実際の動きで受け継がれていく。中には、受け継がれず、消えてしまったものもあったことだろう。そういうものは、もう復元できないし、できたとしても元の姿とは違ってしまう。知恵と工夫を絶やさず伝えることが、伝統に携わる者の責任だということに、先生の言葉で気づくことができた。

三年後に、東京で、オリンピック・パラリンピックが開催される。日本中の文化や伝統を知ってもらうとても良い機会だと大勢の人が言っている。私もそうだと思う。日本には、最先端の技術から、六百年以上も続く古い技や芸能がほんとうにたくさんある。世界の人々が知らない日本も、山のようにあることだろう。私達はそれを伝統として残していくべきだ。

私はまだ自分の課題について答えを見つけ出すことができていないが、沢山練習をして、悩んで、自分の武器になるものをみがいていきたい。それが三年間のうちにみがけるかと言われたら、それは分からない。できるかもしれないし、見つけ出すことさえできないかもしれない。しかし、できなかったとしても、海外の方に伝統のことを教えたり話し合ったりする中にも、答えへの鍵はあると思う。それに私の役目は、今まで太鼓を打ってきた経験を誰かに残していくことだ。焦ることはない。機会は沢山やってくるだろう。どれだけ確実なことを伝えるかが大切ではないだろうか。

伝統とは、伝えられてきたことをより集めて、それをまた伝えることだ。今日に伝わり切らなかったものもある。だからこそ、今ある継承されてきた文化を、決して絶やしてはならないと私は思う。

審査員特別賞

あたりまえをあたりまえにしない

大田区立大森第六中学校　三年
山口（やまぐち）　美莉（みのり）

皆さんは今日何を食べましたか。ご飯、パン、肉、魚、野菜、果物、私たちが住む日本にはたくさんのおいしいものが溢れています。おなかが空いたら食べる、それが私たちのあたりまえです。

しかし、これは世界の人々にとっても同じようにあたりまえなのでしょうか。きっと、誰しも一度は聞いたことがあると思いますがこれは決してあたりまえではありません。世界に住むおよそ九十億人のうちの七億九五〇〇万人、九人に一人が満足に食事ができないどころか命の危機にさらされています。この現実を、私は常日頃考えたことはありませんでした。それに加え、そういった貧しい地域の人たちは私たちが生きてゆく上で不可欠な水も、安心して飲むことができません。このように明日生きられる保障もなく、今日を生き抜くことで精いっぱいな人も少なからずいるのです。

この現実を直視して、皆さんは何を感じますか。ああ、そんな暮らしをしていてかわいそうだな。私たちはおいしい物を好きなだけ食べられて幸せだな。その幸せがつくり出してしまう「食品ロス」を忘れてはいけません。食品ロスとは、食べられるのに捨ててしまった食品のことを言います。日本では年間に五〇〇から八〇〇万トンもの食品ロスがあります。「賞味」期限の切れた食品や食べ残しなど、大量生産、大量廃棄のサイクルで日本の食は確立しているのです。

私はバイキングへ行ったとき、ある家族の食事がとても強く印象に残ったことを覚えています。その家族は、たくさんのお皿にとりあえずかたっぱしから料理をのせていました。それを残さず完食するなら良いものの、食事中はずっとおしゃべりをして、お皿の料理は五分の一手をつけたかという状態で帰って行ってしまいました。きっと料理は写真を撮るために盛ったのだと思います。食べ物は食べるためにあるのに、食べられることに感謝しなければいけないのに、と私はやるせない気持ちになりました。おいしそうに盛りつけられた料理を悲しそうな目で見つめながら片づける店員さんのあの目は、忘れることができません。

私たちの幸せは、私たちのあたりまえは、世界の誰かを犠牲にした上に成り立っているということに私は気づかされました。もったいなく捨てられた食べ物を貧しい地域の人に分けることができるなら、どれだけの人を救い笑顔にできるでしょう。実際に、世界で一年に生産されている二十五億トンの穀物を七十三億人に平等に分けると一人あたり三四〇キログラムも食べることができます。日本人が一年で食す穀物は一人あたりおよそ一五九キログラム、プラス野菜などもあるので十分に足りるはずなのです。本当だったら皆がおいしい物を食べて笑顔の日々を送ることがあたりまえなのに。そのあたりまえを、私たちは奪って今生活しているという紛れもない事実を、私たちは必ず受けとめなくてはいけません。そして、欲張ることなく食べ、感謝の心を忘れない。こんなほんの少しのことでも多くの人が気をつければ大きな力になります。おなかがいっぱい、もう食べられないと思っても、作ってくれた人へ、今こうして満足するまで食べられていることへの感謝があれば、もう少し！と思えるはずです。

あたりまえをあたりまえにしない。これが一番難しくもあり、一番大切なことでもあるのだと私は思います。

審査員特別賞

「いただきます」がある意味

世田谷区立芦花中学校　二年
山本（やまもと）　真由（まゆ）

一人で食事するときも「いただきます」と言うだろうか。これはあるテレビ番組の企画内容で、複数の芸能人が食事風景を隠し撮りされていました。結果は六人中三人が「いただきます」と言っていました。私はこの企画を面白そうと思って見ていましたが、途中、私自身食事の時に「いただきます」をしっかり言えているか考えてみました。家族が一人でもいれば「いただきます」と普通言うのに全く一人の時は無意識に何も言わず、食べています。なぜなのか。それは、「いただきます」は作ってくれた人のためにあると思っていたからです。ですが、このようないきさつから「いただきます」という言葉には、他にも忘れている大切な意味があるのではと考えました。

まず「いただく」の語源を調べたところ、神様にお供えした物を食べる時や、位の高い方から物を受け取る時にかかげたことから「食べる」「もらう」の謙譲語として使われるようになったとされています。そのことをふまえて、「いただきます」という言葉には三つの感謝すべきことがあるのではないかと考えました。

一つ目は、料理を作ってくれた人への感謝です。

「ご飯を作って下さい。」

と言わなくても、ご飯の時間になれば普通にテーブルに色んな料理が並びます。もし自分のためにご飯を作ってくれる人がいなかったらどうしますか？毎日三食かかさず作ってくれている人達は、偉大な存在であり、感謝しなければいけない人の一人なのです。

二つ目は、動植物が私達に命をくれていることに対しての感謝です。一食を食べるのにいくつの命が失われているでしょうか。当たり前のようにある食材は、一つ一つが命であり、それは忘れてはいけないことだと考えました。

三つ目は、食材を育ててくれている人への感謝です。私の祖父母は畑で野菜を育てています。祖父母の家に行くと、祖父母が毎朝早く畑へ出かけていき、野菜の様子をみています。それは、雨が降っている時でも、どんなに暑い時でもです。農家の人はこれを職業にし、毎日ずっとやっているのですから非常に大変だと考えられます。そんな方々に感謝する必要があるのではないでしょうか。

さらに調べていくと、もう一つ、食べ物をいただくことにあたり忘れてはいけないことが分かりました。それは、今の自分達とはかけ離れた現状、「食糧難」です。環境問題などを提起しているＮＰＯ法人、地球村のレポートによると、地球中に飢餓で亡くなっている人が一日四～五万人おり、七割が子どもだそうです。ここまで来てしまうとどれだけ食料がないのかと思ってしまいがちですが、本当は十分に食料があります。

例えば、穀物だとすると年間に二十四億トンも作られており、これは世界中の人が生きていける量の二倍もあります。ですが、一人当たりの食料供給量を比較してみると、日本は必要最低摂取カロリーを三十一パーセントも上回っていますが、東アフリカにあるソマリアでは、十六パーセント不足しています。私達のように食べるものがいつでも十分手に入るのは、世界のおよそ二割の人だけなのです。

また、穀物は人間が食べるだけでなく、先進国では穀物の六割が家畜の餌になっています。結果として、世界の二割程の先進国に住む私達が、世界の穀物の半分以上を消費していることになります。ではなぜ平等に穀物を分けられることができないのでしょうか。それは、貧しいからです。国が貧しいと、国は国民が食べる穀物を買えません。さらに、運搬するための道路整備や売買が適正に行えるような市場整備が必要です。そのため、食料難を解決するには最低限の経済の発展が急務なのだと、レポートには書かれています。

今回私は、「いただきます」のこの六字からだけでも、命の事や世界の現状など、多くの事について考えることができました。これからは、しっかりとそれらを意識する事が大切なのではないでしょうか。動植物を育てている人の苦労。命をくれる動植物。その意思を受けついでおいしい料理を作ってくれる人がいること。この全ての恵まれた環境に感謝をすることです。好きな物を好きなだけ食べられることは決して当たり前のことではなく、たくさんの人の努力や犠牲の上に成り立っていることを忘れてはいけません。これらが「いただきます」がある意味です。

会長特別賞　六十一名（氏名五十音順）

○「戦争」という二文字　あきる野市立御堂中学校　三年　青木　英里
○社会の縮図　東京都立桜修館中等教育学校　二年　安達　由祐
○私が願う未来　東京都立大泉高等学校附属中学校　一年　五十嵐　心音
○部活動を通じて　あきる野市立秋多中学校　三年　池元　柊哉
○陸上を通じて成長した自分　稲城市立稲城第四中学校　三年　磯部　菜々
○虫グルメの発展と自分の関わり　板橋区立板橋第三中学校　三年　稲村　洸希
○真の幸せ　立川市立立川第三中学校　三年　今中　千尋
○視覚障害　あきる野市立五日市中学校　三年　岩木　希
○みんな親善大使　光塩女子学院中等科　三年　大石　恵里佳
○「差別」それは重い言葉　國學院大學久我山中学校　三年　太田　賀子
○今いる自分に誇りを持って生きていく　立川市立立川第一中学校　三年　大谷　萌二加
○失敗は成功のもと　渋谷区立原宿外苑中学校　三年　大西　悠
○「今」を変えるために　調布市立第八中学校　二年　大渕　みなみ
○「書」～日本文化を世界へ～　調布市立第八中学校　一年　岡本　明朱莉
○健康であるということ　立川市立立川第二中学校　二年　奥野　莉奈
○難民を知り、考える　東海大学菅生高等学校中等部　二年　奥村　素晴
○私達にできること　立川市立立川第八中学校　三年　小野里　亜季
○母の存在　あきる野市立五日市中学校　三年　加藤　葵
○私たちの暮らしと政治　あきる野市立秋多中学校　三年　包國　芽生
○未来に繋ぐ職人の技　渋谷区立原宿外苑中学校　一年　桑原　杏妃
○今、私達にできること　あきる野市立御堂中学校　三年　今　花織
○「自分」の在り方　板橋区立中台中学校　三年　齋藤　彬就
○物を大切に　東京都立両国高等学校附属中学校　二年　齋藤　理乃
○ココロを一つに　國學院大學久我山中学校　三年　坂口　航太
○初めて自然の広大さと大切さを知った時　調布市立第八中学校　一年　佐藤　吹
○他力本願ではなく自分の意見を　荒川区立第七中学校　二年　澤田　理花
○今一度見直したい日本の行事と暦　東京学芸大学附属小金井中学校　二年　白代　奈々子
○報道と命と　板橋区立中台中学校　三年　杉山　優
○海の手助けをして　杉並区立井荻中学校　三年　鈴木　蘭
○「愛」～狐と狸から学んだ事～　板橋区立中台中学校　一年　祖山　大樹

○つなぐ
あきる野市立東中学校　三年　高木晴輝

○Why Japanese People!?
國學院大學久我山中学校　三年　高村健大

○「ネット社会」に生きる一員として
板橋区立中台中学校　三年　田中さえ

○ご近所さんを大切に
星美学園中学校　三年　坪井まほ

○初めての選手団
立川市立立川第二中学校　二年　徳冨遼太

○産まれたときからの差別
杉並区立井荻中学校　二年　長尾日菜

○ココロのバリアフリー
國學院大學久我山中学校　三年　中　汐里

○地域の一員になる
立川市立立川第一中学校　二年　中島颯希

○一人のマナーが電車を変える
千代田女学園中学校　三年　仲野心結

○守る人の思いやり
杉並区立井荻中学校　三年　中山綾乃

○見えないところで
東京都立桜修館中等教育学校　一年　沼﨑明莉

○心の中のバリアフリー
立川市立立川第二中学校　二年　野村未恭

○人との関わり
あきる野市立東中学校　三年　長谷川綾香

○毎日心がけている事
立川市立立川第四中学校　二年　羽田将人

○心から心へ
渋谷区立原宿外苑中学校　二年　林　利咲

○やさしさで得られるたくさんのもの
東京都立桜修館中等教育学校　一年　坂齊秀哉

○受験がなかったら
板橋区立中台中学校　二年　藤川啓吾

○ルールの先にあるマナー
東京都立大泉高等学校附属中学校　一年　藤本悠貴

○命の重さ～人間と猫から考える～
東京都立桜修館中等教育学校　三年　星野倖嬉

○与える幸せ
立川市立立川第五中学校　二年　本庄真己登

○「障害者」と「障碍者」
杉並区立井荻中学校　三年　牧野彩音

○両親への手紙
目黒区立第七中学校　三年　松岡美穂

○私にできること
立川市立立川第一中学校　三年　松本千夏

○タバコの未来
東京学芸大学附属小金井中学校　二年　本山実和子

○選挙を考える
立川市立立川第六中学校　三年　森本綺莉

○いじめ問題
あきる野市立西中学校　三年　矢坂美来

○思いやりを持って行動すること
立川市立立川第一中学校　二年　山上ひより

○永遠の憧れ
渋谷区立原宿外苑中学校　三年　山口蘭

○「歩きスマホ」をやめるために
杉並区立井荻中学校　三年　吉尾理奈

○名言が伝える
大田区立大森第六中学校　三年　吉澤百香

○音楽の大切さ
板橋区立中台中学校　二年　吉田涼矢

審査員長講評

東京女子体育大学名誉教授
尾木和英

審査に当たった者を代表して一言申し上げたいと思います。

十名の発表者の皆さん、応募された七，四三二名の方を代表するにふさわしいそれぞれに立派な発表だったと思います。皆さんそれぞれに、身の回りの出来事、あるいは経験したこと、あるいは学習したことの中から課題を見つけ、そこから自分の問いを見つけて問いかけをし、考えを成立させる「主張」という形にまとめて、今日、立派な発表をなさったということは、素晴らしいことであったと思います。また、発表者の方々だけではなく、この会場に来ておられます中学生その他多くの方々を含め、今回こうした機会にチャレンジして、自分の思いを訴えかけたことに対しまして、まず、心から拍手を送りたいと思います。

特に、発表してくださった十名の皆さんに関して言いますと、自分の思いを声に乗せて訴えかけをしてくださいました。その訴えかけによって、会場にいる我々みんなが「ああ、なるほど。こういうところに問題があるのだな。」とか、「こういうことが大事なのだな。」とか、さらに言うと、「ああ、東京ではこうして立派に中学生が成長している。素晴らしいことだなあ。」という大変うれしい気持ちになったわけでございます。

特に知事賞を受賞されました柴田葉さんについて言いますと、いかにも中学生らしい、「自分が今できることはなんだろうか。」「自分が今しなくてはいけないことはなんだろうか。」、こういう問いかけのもとに、実践を伴った、さらに言うと、自分の生き方と結びつけた主張をなさったということが、我々審査にあたる者の心を捉えたわけであります。

また、柴田さん、飯沼さん、黒澤さんに共通することでありますが、熱意や考えたことをこれからも自分のものとして大切にしたいという思いが三人の方の主張に含まれていたということが、審査結果となって表れたと思います。しかし、その他の方々も、まさに紙一重でありまして、それぞれに御自分の思いやその方だけの問題意識、訴えかけが我々に伝わってきた、そのことが非常に素晴らしかったということを、ここで申しあげたいと思います。

今、学校の授業では、主体的・対話的に学びを深めようということで取組みがなされています。今日受賞された皆さんは、今日主張したことで、一つのチャレンジをされました。「自分はこういうことができる人間なのだ。」「あの日、こういうことをやったんだ。」ということを心に刻みこんで、ぜひ、これからの学校の学習の中で生かしていただきたい、さらに言うと、近い将来、社会人としてこの東京を支える方たちに成長してほしいという願いを申し上げまして、私の講評に代えさせていただきます。

本日は本当におめでとうございました。

平成二十九年度「中学生の主張東京都大会」の概要

○日　時　平成二十九年九月三日（日曜日）午後一時から午後四時まで
○場　所　東京都庁第一本庁舎　五階　大会議場
○主　催　こころの東京革命協会
○共　催　東京都
○後　援　東京都教育委員会

開　会
一　あいさつ　東京都青少年・治安対策本部長　こころの東京革命協会事務局長　大澤　裕之
二　中学生の主張　十名
―休憩（審査）―
三　表彰式
（一）審査結果発表　東京女子体育大学名誉教授　尾木　和英
（二）表彰状贈呈
閉　会

○審査員
尾木和英（審査員長）東京女子体育大学名誉教授
井門明洋　東京都公立中学校ＰＴＡ協議会会長
長田渚左　ノンフィクション作家
中村良彦　東京都私立中学高等学校父母の会中央連合会会長
栗原宏成　東京都教育庁指導部義務教育指導課長
大澤裕之　東京都青少年・治安対策本部長　こころの東京革命協会事務局長
森山寛司　東京都青少年・治安対策本部総合対策部長

○審査基準
（一）論旨・内容について
ア　中学生らしい新鮮な主張であるか。
イ　個人の感想や体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
ウ　提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
エ　論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
オ　表現が適切であるか。

（二）論調・態度について
カ　声、言葉は明瞭で聞きやすいか。
キ　話しぶりに熱意と迫力があるか。
ク　主張の内容が、聴衆に共感と感動を与えているか。
ケ　聴衆をよく見て、落ち着いて話したか。

【参考】平成 29 年度「中学生の主張　東京都大会」募集概要

1　応募資格

都内在住又は在学中の中学生（平成２９年４月１日現在）

2　テーマ

○ 家族や地域とのふれあいを通して感じたことやうれしかったこと
○ 学校生活及び日常生活において努力したことや感動したこと
○ 部活動やボランティア活動などの体験を通して成長したことや学んだこと
○ 社会や世界に向けての意見、未来への希望　など

上記の内容を参考に、題名を決めること。

3　応募方法

(1) ４００字詰原稿用紙（Ｂ４判・縦書き）４枚程度
(2) 原稿は以下のように書出し、必ずステープラで左上を留めること。
　１行目　　題名
　２行目　　学校名及び学年
　３行目　　氏名（ふりがな）
　４行目から　本文
(3) 個人応募の場合は、必ず学校の住所と電話番号及び担当の先生の名前を裏面に書くこと。
(4) 応募は、１人１点（未発表の作品）に限る。
(5) 応募作品は、原則として返却しない。ただし応募時に返却希望がある場合は学校単位で返却する。

4　締　　切　　平成２９年７月２０日（木曜日）

「第３９回　少年の主張全国大会」東京都代表選考会に向けた応募は上記期限で締め切る。

なお、より多くの中学生に取り組んでもらうため、平成２９年９月１１日（月曜日）到着分まで応募を受け付け、優秀作品については「会長特別賞」を贈呈する。

5　審　　査　　主催者が応募作品を審査して、発表者及び表彰式における表彰対象者は８月、それ以外は１０月に学校を通じて本人及び関係者に通知する。

応募作品の審査は、第一次審査及び第二次審査は事務局で行い、第三次審査は東京都並びにこころの東京革命協会の協議で東京都代表選考会発表者及びその他表彰対象者を決定する。大会当日における発表者の審査は、審査員の協議で行う。

6　大会及び表彰等

(1) 日　　時　平成２９年９月３日（日曜日）午後１時から４時まで
(2) 場　　所　東京都庁第一本庁舎５階大会議場
(3) 参 加 者　主催者が選出した発表者１０名、審査員特別賞受賞者及びその関係者等
(4) 発表方法　応募した作品に基づいて、本人が５分程度で発表する。
(5) 表　　彰　発表者のうち最優秀者１名に対し知事賞、優秀者２名に東京都教育委員会賞、その他７名に会長賞を授与する。また、審査員特別賞の授与も行う。知事賞受賞者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「第３９回　少年の主張　全国大会」の出場候補者として推薦する。
(6) そ の 他　ア　応募者全員に参加賞として記念品を贈呈する。
　　イ　受賞者の写真、氏名、学校名、学年及び題名を東京都及び協会のホームページに掲載するとともに、受賞作品を文集にまとめ、学校等へ配布する。

応　募　状　況

1　今年度応募状況

（単位：人、校）

平成 29 年度	応　募　者　数				応募校数
	1 年生	2 年生	3 年生	計	
	1,578	2,864	3,339	7,781	70

※応募総数のうち、知事賞・東京都教育委員会賞・会長賞・審査員特別賞選考対象作品は、7 月 21 日までに受け付けた 7,432 作品

2　過去の応募状況

（単位：人、校）

年度	応募者数	応募校数	年度	応募者数	応募校数
昭和 54	219	―	10	739	45
55	184	―	11	491	37
56	265	37	12	639	42
57	454	40	13	797	41
58	142	27	14	562	37
59	169	39	15	736	48
60	230	40	16	1,961	60
61	289	58	17	1,552	58
62	509	79	18	2,230	84
63	527	80	19	1,919	86
平成元	742	102	20	2,276	79
2	326	70	21	4,105	105
3	355	67	22	3,153	98
4	472	69	23	1,864	77
5	385	36	24	3,316	93
6	280	53	25	3,739	72
7	259	48	26	8,446	97
8	230	40	27	9,983	95
9	500	58	28	8,620	95

前回までの入賞者

昭和54年度（第1回）　昭和54年9月13日・千代田区公会堂

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	少年として訴えたいこと	足立区立花畑北中学校・３年	安井正二郎
優秀賞	少年として訴えたいこと	東京学芸大学附属竹早中学校・２年	山本　祐子
	少年として訴えたいこと	港区立高陵中学校・３年	奥谷まゆみ
	私の家庭	目白学園中学校・２年	高橋　敏子
	私の家庭	目黒区立第一中学校・３年	岩崎　知可
	私の仲間	大田区立馬込東中学校・２年	上谷　啓之
	私の家庭	檜原村立北秋川中学校・３年	小泉さとみ
	私の仲間	港区立赤坂中学校・３年	大野　朋子
	いま学校で考えること	小金井市立緑中学校・３年	松延　美佳
	少年として訴えたいこと	小金井市立緑中学校・３年	三木　暁朗

昭和55年度（第2回）　昭和55年9月17日・東京都勤労福祉会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	非行は私の問題	葛飾区立金町中学校・２年	阿部ゆうりか
	＊＊全国大会出場（昭和 55 年 11 月 24 日・明治神宮会館）青少年育成国民会議会長賞＊＊		
優秀賞	中三として考えていること	小平市立第五中学校・３年	西山　是美
	自分を生きる	立川市立第九中学校・３年	山田　純子
	教育が中学校の友情に何をしたか	目黒区立第十中学校・３年	磯部大吾郎
	床に捨てられたガムに思う	羽村町立羽村第二中学校・３年	井沢英理子
	一匹の猫	世田谷区立富士中学校・３年	高松　幸子
	ともだち	北区立富士見中学校・１年	小出　大介
	地域のために私のやりたいこと	台東区立蔵前中学校・３年	辻浦　弘子
	今、考えること	港区立赤坂中学校・３年	小林　弘明
	友達の大切さ	目黒区立第一中学校・２年	笹　祐子

昭和56年度（第3回）　昭和56年9月17日・東京都勤労福祉会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	明るい家庭はみんなの努力で	江東区立深川第一中学校・３年	田名網明子
	＊＊全国大会出場（昭和 56 年 11 月 7 日・明治神宮会館）青少年育成国民会議会長賞＊＊		
優秀賞	大空へ飛びたつ前に	港区立赤坂中学校・３年	西村　恵摩
	国際障害者年について	目黒区立第一中学校・２年	十河　郁子
	いま学校生活で考えていること	葛飾区立金町中学校・３年	阿部ゆうりか
	非行について	練馬区立開進第三中学校・３年	笹川　北等
	国際障害者年に思う	足立区立上沼田中学校・３年	佐瀬　順一
	私は目的を持って高校受験をするのです	立川市立立川第九中学校・３年	吉武　淳子
	自分の夢に生きる	北区立富士見中学校・３年	三好貴美子
	人間関係について	田無市立田無第三中学校・１年	澤田　仁美
	私の歩み	板橋区立加賀中学校・２年	越川　清美

昭和57年度（第4回）　昭和57年9月21日・東京都勤労福祉会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	戦争と平和と私達	目黒区立第一中学校・３年	石見　文子
	＊＊全国大会出場（昭和 57 年 11 月 7 日・日本青年館）青少年育成国民会議会長奨励賞＊＊		
優秀賞	明日のため今日努力しよう	千代田区立麹町中学校・２年	山田　真帆
	好きなことに打ちこんで欲しい	練馬区立上石神井中学校・３年	前之園めぐみ
	カムバック・サーモン	八王子市立長房中学校・３年	早坂　一幸
	グループ活動と私	保谷市立明保中学校・２年	小坂紫陽子
	中学世代からの提言	江戸川区立瑞江第三中学校・３年	鞠子ひとみ
	百万人の手話	足立区立第一中学校・３年	滝元さおり
	ぼくの友達	台東区立福井中学校・１年	大木謙太郎
	悩みを聞いて欲しい	目黒区立第一中学校・３年	高橋　牧子
	今、中学校で	八王子市立由木中学校・３年	望月　　淳

昭和58年度（第5回）　昭和58年10月4日・千代田区公会堂

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	僕の母は二分の一	北区立堀船中学校・３年	芳賀也崇志
優秀賞	ごちそうさま	足立区立第十六中学校・１年	古田みどり
	もっとおもいやりを持って	練馬区立関中学校・１年	富永亜希子
	道ばたで	台東区立福井中学校・２年	須崎理恵子
	学級委員として	渋谷区立笹塚中学校・２年	高橋　勝洋
	ボランティア活動に今問われるもの	女子学院中学校・２年	斉藤のゆり
	目的をもって生きること	世田谷区立用賀中学校・３年	星野　　豊
	自己の確立	町田市立薬師中学校・３年	下園　昌彦
	今、学校生活の中で	清瀬市立清瀬第三中学校・２年	金田　幸子
	明日は私達の手で	足立区立第十六中学校・２年	関　　聡美

昭和59年度（第6回）　昭和59年9月6日・東京都勤労福祉会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	退一歩想	板橋区立板橋第一中学校・２年	桂　久美子
優秀賞	３Ｂ運動	明治大学付属中野中学校・３年	山田　智之
	私の愛する学校、十三中と友	足立区立第十三中学校・３年	山中　信子
	学校生活の中での奉仕とは	台東区立蔵前中学校・３年	五十嵐里香
	愛、世界にかける橋	江東区立深川第一中学校・３年	佐々木秀美
	よりよい中学校生活をめざして	板橋区立志村第五中学校・１年	笠間　勝久
	挨拶と人の輪	清瀬市立清瀬第五中学校・２年	八代　　牧
	質素な中国の生活から学んだこと	小平市立花小金井南中学校・３年	長井　　勝
	一つの命	駒沢学園女子中学校・３年	白井　友子
	一枚の葉書	立川市立立川第九中学校・３年	谷野　泰史

昭和60年度（第7回）　昭和60年10月2日・経団連会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	祖母に学ぶ	江東区立深川第一中学校・３年	金井　里佳
優秀賞	再建運動に寄せて	品川区立東海中学校・２年	小野村比佐
	ぼくたちと自立	狛江市立狛江第四中学校・３年	奈良　暢明
	勇気も思いやりから	練馬区立関中学校・３年	榊原倫一郎
	渋谷心障センターへ行って	台東区立蔵前中学校・２年	三品　佳子
	「優しさ」のこと	荒川区立第五中学校・１年	竹内　亜紀
	学校再建・完成に向けて	品川区立東海中学校・２年	鎌田　征司
	蛍の里をもっときれいに	青梅市立第六中学校・２年	横田久美子
	友	練馬区立開進第三中学校・２年	菅　由香
	「自由」とは何だろう	中野区立第四中学校・３年	松永　春央

昭和61年度（第8回）　昭和61年10月2日・砂防会館ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	ボランティア活動	板橋区立第一中学校・３年	村上　淳
優秀賞	命の尊さ	練馬区立関中学校・２年	馬田　操
	私は先生になりたい	練馬区立開進第三中学校・１年	平田かおり
	私達の二十一世紀	北区立桜田中学校・３年	冨田　愛美
	「あいさつ」のこと	足立区立上沼田中学校・３年	塚本三保子
	自然と私達	駒沢学園女子中学校・２年	川路　時子
	私たちはどう生きるべきか	品川区立東海中学校・３年	北川　明子
	掃除の大切さ	渋谷区立上原中学校・２年	伊達　昌世
	青春時代の生き方	町田市立南成瀬中学校・３年	吉田　晶
	私たちの「オアシス運動」	足立区立鹿浜中学校・３年	中野亜理佐

昭和62年度（第9回）　昭和62年10月６日・東條会館ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	チョゴリ	三多摩朝鮮第二幼初中級学校・２年	曺　小夜
	＊＊全国大会出場（昭和 62 年 11 月 8 日・日本青年館）青少年育成国民会議会長奨励賞＊＊		
優秀賞	豊かな心で	駒沢学園女子中学校・３年	松田　享子
会長奨励賞	言葉を通じて思うこと	千代田区立麹町中学校・２年	堀口　奈美
	よりよい環境を私達の手で	渋谷区立外苑中学校・３年	小河　賢治
	家族のつながり	北区立桜田中学校・３年	富田佐智子
	家族のしあわせ	町田市立町田第三中学校・３年	龍野　紋香
	かたつむり	桐朋女子中学校・２年	正木　綾
	日本に帰ってきて	北区立堀船中学校・３年	小倉　斌
	助け合いの心	八王子市立打越中学校・３年	遠藤亜矢香
	思いやり	板橋区立板橋第一中学校・３年	水谷　裕子

昭和63年度（第10回）　昭和63年10月6日・東商ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	勉強より大事な勉強	桐朋女子中学校・３年	正木　綾
	＊＊全国大会出場（昭和 63 年 11 月 6 日・日本青年館）特別奨励賞＊＊		
優秀賞	言葉の違いを超えて	渋谷区立外苑中学校・３年	小山美由紀
会長奨励賞	小さな国際人として生きる	板橋区立板橋第一中学校・３年	吉川　陽子
	人の心	千代田区立一橋中学校・２年	志田実希子
	書写を通じて	秋川市立秋多中学校・３年	成定　愛子
	何のために勉強をするのか	町田市立南大谷中学校・３年	芦川　泰子
	僕の決心	板橋区立志村第一中学校・２年	西垣　謙
	このごろのテレビに思うこと	町田市立成瀬台中学校・３年	島　愛子
	今、いじめを考えて	板橋区立板橋第一中学校・３年	近藤　裕子
	思いやりの心	渋谷区立上原中学校・３年	日下部　覚

平成元年度（第11回）　平成元年10月3日・東商ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	足	西東京朝鮮第二初中級学校・３年	鄭　淳実
優秀賞	師の発見	共立女子中学校・３年	郡司知香子
会長奨励賞	国際社会って何だろう？	荒川区立道灌山中学校・３年	藤田友紀枝
	同じ人間なのだから	八王子市立石川中学校・３年	田中　桃子
	誰もが住みやすい町づくり	町田市立町田第三中学校・１年	臨光　美佐
	ボランティアって何でしょう	台東区立蓬莱中学校・３年	山本優里亜
	部活で得た「感動」	北区立桜田中学校・３年	近藤　真理
	人間の絆	渋谷区立原宿中学校・３年	稲石　大祐
	満たされた中で	町田市立成瀬台中学校・３年	武田　香里
	国際化社会について思うこと	町田市立真光寺中学校・３年	角田　善彦

平成2年度（第12回）　平成2年10月4日・東商ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	お年寄りとともに	恵泉女学園中学校・３年	田中　睦美
優秀賞	思いやりの心	町田市立町田第三中学校・２年	臨光　美佐
会長奨励賞	近隣やすらぎの街	練馬区立石神井南中学校・３年	吉本亜希子
	見えない目	板橋区立板橋第一中学校・３年	酒井くみ子
	「読める」「書ける」喜びを…	青山学院中等部・２年	正木　朋
	苦しみを乗り越えて	町田市立南大谷中学校・３年	松井　竜作
	地球を救う心「風の谷のナウシカ」を見て	足立区立第三中学校・２年	鈴木奈穂子
	限りない愛を伝えたい	渋谷区立笹塚中学校・２年	須永ゆり子
	生きることの意味	共立女子中学校・３年	上田　啓子
	読書の勧め	千代田区立一橋中学校・３年	仙波　正樹

平成3年度（第13回）　平成3年10月8日・東京都児童会館ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	ボランティア活動と本当の目	多摩市立貝取中学校・３年	末吉　優子
優秀賞	母の笑顔	八王子市立松が谷中学校・３年	渡辺　友恵
会長奨励賞	聞こえない叫び	町田市立つくし野中学校・３年	渡辺まどか
	思いやり	共立女子中学校・３年	阿部はるひ
	普通に生活できる喜び	町田市立真光寺中学校・３年	高野　寛明
	生命の大切さ	町田市立町田第三中学校・３年	臨光　美佐
	地球を守る	共立女子中学校・３年	飯牟禮充代
	親友、それは心の支えとなる人	立川市立立川第二中学校・３年	黄　莉香
	教育産業について	町田市立鶴川中学校・３年	岡野佐弥子
	私の名前	西東京朝鮮第二初中級学校・３年	李　玲華

平成4年度（第14回）　平成4年10月7日・東京都児童会館ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	わかば学級と私	町田市立町田第一中学校・３年	五十子若葉
優秀賞	初めの一歩	東京学芸大学附属竹早中学校・３年	上岡　洋子
会長奨励賞	戦争について考える	町田市立金井中学校・３年	小林　千尋
	私は地球人	西東京朝鮮第二初中級学校・３年	金　美香
	何か忘れていませんか？ー今、私達にできること	町田市立鶴川中学校・３年	山邊久美子
	物を大切にする心	青梅市立第六中学校・１年	宿谷美由紀
	助けあう力	町田市立真光寺中学校・２年	稲津　静香
	これからのリサイクルのあり方	町田市立成瀬台中学校・３年	三谷　隆
	今も残る戦争の爪跡ー沖縄を訪れてー	文京区立第七中学校・３年	今　弘枝
	ぼくの主張	聖学院中学校・２年	米井　聡

平成5年度（第15回）　平成5年10月5日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	“けいこちゃん”を家族に迎えて	北区立飛鳥中学校・３年	坂部　愛
優秀賞	ぼくの耳が悪くなって	台東区立下谷中学校・３年	植木　康則
会長奨励賞	はじめのいーっぽ	葛飾区立金町中学校・３年	八巻　美保
	美しい環境を守りたい	八王子市立由井中学校・２年	富澤　裕介
	はやく日本語を覚えたい	荒川区立日暮里中学校・３年	秋　允河
	心の傷は治らない	品川区立戸越台中学校・１年	北神　智子
	体験して学んだこと	秋川市立秋多中学校・３年	尾又千恵子
	可能性と追求心	八王子市立浅川中学校・３年	山田　雅穂
	消防少年団とこれからの私	江戸川区立松江第五中学校・３年	寺澤ひろみ
	家族	駒沢学園女子中学校・３年	岸田　和泉

平成6年度（第16回）　平成6年9月29日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	あたたかい目	荒川区立日暮里中学校・３年	尾崎　幸恵
優秀賞	差別	駒沢学園女子中学校・３年	韓　　礼美
会長奨励賞	自分の目と耳と心で感じること	杉並区立西宮中学校・３年	里吉　　希
	老人	東京学芸大学附属大泉中学校・３年	高畑奈央子
	自分の意見の大切さ	杉並区立宮前中学校・２年	國本　博義
	歓送会、そして副会長になって	千代田区立九段中学校・３年	幕内　暁子
	ゴミ問題について	東京中華学校・１年	朱村　　祥
	大切な友達	杉並区立宮前中学校・１年	吉野未紗生
	十七枚のハガキが教えてくれた戦争	新宿区立落合第二中学校・３年	斎藤　和歌
	「共に生きる社会」をめざして	八王子市立第三中学校・３年	大石　友里

平成7年度（第17回）　平成7年10月3日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
知事賞	僕たちにできること	荒川区立日暮里中学校・１年	高　　宗哲
会長賞	家族	世田谷区立八幡中学校・３年	斉藤かおり
会長奨励賞	国際的中学生を目指して	杉並区立西宮中学校・３年	山中　大樹
	戦争のない世界へ	世田谷区立八幡中学校・３年	星野　玲子
	私の夢	板橋区立志村第四中学校・３年	石司　えり
	「ランナー」	西東京朝鮮第二初中級学校・３年	崔　　愛美
	壁の前で	北区立浮間中学校・２年	坂田　菜乃
	現代社会への危機	昭島市立拝島中学校・２年	田尻みのり
	「翼をください」	台東区立下谷中学校・２年	岡村　朋子
	「一瞬の中にある煌き」	北区立新町中学校・３年	三田　直穂

平成8年度（第18回）　平成8年10月3日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
知事賞	蜘蛛の巣	台東区立下谷中学校・３年	岡村　朋子
	＊＊全国大会出場（平成８年 11 月 10 日・日本青年館）内閣総理大臣賞＊＊		
会長賞	子供の気持ち	江東区立第四砂町中学校・２年	辻子ゆうき
会長奨励賞	一人がみんなのために みんなが一人のためにできること	府中市立府中第三中学校・２年	谷田部　慧
	人間らしく生きていける世界	中央区立銀座中学校・３年	加納沙也香
	初めの一歩	田無市立田無第一中学校・３年	小南　　梓
	グラウンドにねそべって	杉並区立宮前中学校・３年	小峯　和明
	サヨウナラ「ニッポニア・ニッポン」	北区立堀船中学校・２年	遠藤　夏子
	みんなに支えられて	荒川区立日暮里中学校・１年	酒井もと子
	心の中に壁を作らないで	荒川区立日暮里中学校・１年	大吉秀次郎
	僕の勉強	品川区立城南中学校・２年	木之下健一

平成9年度（第19回）　平成9年10月7日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	チョゴリ	西東京朝鮮第二初中級学校・３年	黄　愛理
優秀賞	わかってください	町田市立真光寺中学校・２年	稲津　夢香
会長奨励賞	金色の髪	八王子市立松が谷中学校・３年	永島美和子
	ボランティア活動をして	三鷹市立第四中学校・２年	小島　佑介
	素直になりたい	調布市立第三中学校・１年	松隈　裕美
	心に響くふれ合いをいま…	文教大学付属中学校・２年	松本　真実
	私の妹	千代田女学園中学校・２年	藤澤阿弥子
	運命の試練	荒川区立日暮里中学校・２年	石田　哲雄
	学校の規則について	文京区立第六中学校・２年	島田　真衣
	私の存在	共立女子中学校・３年	山崎　沙重

平成10年度（第20回）　平成10年10月7日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	私の気持ち	荒川区立第五中学校・１年	星野佐世子
優秀賞	「私の宝もの」日本での貴重な体験	東京韓国学校中等部・２年	金　佼眞
会長奨励賞	人の気持ちを見つめ直して	調布市立調布中学校・２年	深澤　雄
	いつか飛び立つ日まで	調布市立第三中学校・２年	松隅　裕美
	自立するためのメッセージ	目黒区立第四中学校・２年	荻野　緑
	みんな一人では生きてはいけない	足立区立第十四中学校・１年	明石　清人
	自由と自治	杉並区立宮前中学校・２年	岩切　ゆい
	いじめについて	文京区立第六中学校・２年	山田　文子
	大人と自由	北区立王子中学校・３年	末松あみか
	心の教育って？	北区立堀船中学校・３年	佐貫　洋子

平成11年度（第21回）　平成11年10月6日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	本当の幸せとは…	港区立青山中学校・３年	秋田　絵麻
	＊＊全国大会出場（平成 11 年 11 月 14 日・日本青年館）総務庁長官賞＊＊		
優秀賞	子供の気持ち	杉並区立宮前中学校・３年	渡部明日香
会長奨励賞	大切な命	杉並区立宮前中学校・１年	岡崎　美帆
	言葉よりも大切なこと	創価中学校・３年	竹村　陽子
	父の働く姿を見て	足立区立第十四中学校・２年	権藤　幸典
	外国人差別	八王子市立松が谷中学校・３年	長山　夏子
	「壁」を乗り越えて	調布市立第三中学校・３年	広瀬さやか
	少年兵を知っていますか	文京区立第十中学校・３年	熊谷　恵理
	ありがとうの危機	小金井市立緑中学校・１年	加藤　勇人
	世界を見る目	あきる野市立秋多中学校・３年	山崎　幸

平成12年度（第22回）　平成12年9月24日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	弟	西東京朝鮮第二初中級学校・３年	尹　彰希
優秀賞	僕達をもっと見て下さい	杉並区立宮前中学校・３年	太田　裕之
会長奨励賞	ちびで悪いか	杉並区立宮前中学校・１年	田中　万智
	妹　－ピアノで話そう－	大田区立大森第八中学校・３年	佐野　暁子
	私の宝物	目白学園中学校・３年	山崎　茜
	相手の気持ちを理解して	暁星中学校・３年	依田　靖
	汗と涙と笑顔の父親	杉並区立和田中学校・３年	佐藤　慶太
	人の大切さ	練馬区立練馬中学校・３年	田代　桃子
	将来の夢－バリアフリー－	駒沢学園女子中学校・３年	川口　遊喜
	本当の勉強とは何か	あきる野市立増戸中学校・２年	田邉真理子

平成13年度（第23回）　平成13年9月22日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	努力が教えてくれた事	足立区立第十四中学校・１年	荒谷真理子
	＊＊全国大会出場（平成13年11月11日・国立オリンピック記念青少年総合センター）内閣総理大臣賞＊＊		
優秀賞	自分のためは人のため	駒沢学園女子中学校・３年	佐藤　萌子
会長奨励賞	命のメッセージ	荒川区立南千住第二中学校・３年	渡辺奈央子
	軽べつの目	杉並区立和田中学校・３年	本田　美咲
	心の叫びに優しさを	駒沢学園女子中学校・１年	廣部　優海
	やり直せるって素晴らしい	中央区立銀座中学校・２年	三浦　早知
	母へ	杉並区立宮前中学校・３年	千賀奈津子
	ありがとう、おばあちゃん	荒川区立第五中学校・２年	山中　悠香
	あたたかい目で…	杉並区立宮前中学校・２年	岩切　さや
	たくさんのやさしさ	小金井市立緑中学校・３年	横山　明子

平成14年度（第24回）　平成14年9月14日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	命の大切さ	足立区立第十四中学校・２年	河埜　行彦
優秀賞	自然の未来	杉並区立和田中学校・１年	針ヶ谷健志
会長奨励賞	公共の場でのマナーについて	武蔵野東中学校・３年	内田眞由美
	地球は人間のもの？	東久留米市立西中学校・１年	宇田川しおり
	忘れかけていた「大切なもの」	足立区立第十四中学校・２年	丹下　泰之
	あいさつ	共立女子中学校・３年	遠藤　春香
	心の支え	武蔵野東中学校・１年	神山　由香
	人間として向き合うこと	創価中学校・３年	柴田　浩美
	最後のプレゼント	あきる野市立西中学校・３年	大久保翔吾
	ありがとう	杉並区立宮前中学校・３年	長澤　侑美

平成15年度（第25回）　平成15年9月13日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	おやじが泣いた日	大田区立大森第八中学校・３年	佐藤　順平
優秀賞	「思いやり」のある社会に	あきる野市立秋多中学校・３年	中村　真理
会長奨励賞	障害という心の壁を越えて	創価中学校・２年	青木　優美
	拒食症	杉並区立宮前中学校・３年	岡野のぞみ
	精一杯、生きる	杉並区立宮前中学校・３年	川畑真梨恵
	私の好きな町	星美学園中学校・３年	後藤　尚乃
	私は変わった	練馬区立練馬中学校・３年	鈴木友喜奈
	継続は力なり	杉並区立松渓中学校・１年	高橋　杏子
	店の駐輪場の利用	調布市立調布中学校・２年	中村　美緒
	「代償」	明治大学付属明治中学校・３年	葉騰　寛喜

平成16年度（第26回）　平成16年9月12日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	たった一つの…	足立区立第十四中学校・１年	ｸﾙｽ･ｻﾑﾚｲﾆｰﾙ
	＊＊全国大会出場（平成16年11月14日・国立オリンピック記念青少年総合センター）会長奨励賞＊＊		
優秀賞	みんなの力で頑張る	品川区立東海中学校・２年	皆川　翔子
会長奨励賞	一つの命が教えてくれたこと	武蔵野東中学校・２年	小倉　藍歌
	弟・恵太－そして命－	あきる野市立増戸中学校・３年	岸塚　康子
	ルール	東京学芸大学附属小金井中学校・２年	瀬口　真生
	物の豊かさ・心の豊かさ	調布市立調布中学校・３年	中村　美緒
	夢を変えた言葉	足立区立第十四中学校・１年	西川　真美
	世界に一つだけの命	吉祥女子中学校・３年	丸大　未智
	言葉	立正中学校・３年	宮本　智暎
	真の強さの意味	八王子市立石川中学校・３年	山田　愛里

平成17年度（第27回）　平成17年9月11日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	今に生かそう「江戸仕草」を	墨田区立立花中学校・３年	渡辺　隆介
	＊＊全国大会出場（平成17年11月13日・国立オリンピック記念青少年総合センター）会長特別賞＊＊		
優秀賞	私が得たもの	あきる野市立秋多中学校・２年	岸野　美奈
会長奨励賞	「ハッピー」	板橋区立志村第四中学校・１年	阿部　要
	ボランティア活動をして	あきる野市立東中学校・３年	岡山　李緒
	不登校から学んだこと	調布市立第五中学校・３年	今野　夏希
	気付かせてもらったこと	足立区立第十四中学校・２年	関根　鮎
	私の過去と今の想い	武蔵野市立第一中学校・１年	中村　絵美
	私の大切な家族	練馬区立上石神井中学校・３年	盛　愛
	一人じゃない	駒沢学園女子中学校・３年	横尾　恵
	将来の夢	杉並区立松渓中学校・３年	渡辺　美優

平成18年度（第28回）　平成18年9月10日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	ルールを守る心	東京都立両国高等学校附属中学校・1年	杉山　俊
優秀賞	言葉の持つ力	葛飾区立常盤中学校・1年	本間　千晶
会長奨励賞	助け合う勇気	駒沢学園女子中学校・3年	一瀬　裕美
	地域のふれあいの大切さ	東久留米市立大門中学校・2年	北島　幸妃
	命のつながり	杉並区立杉森中学校・3年	工藤　杏子
	本当の幸せとは	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	完山友香莉
	広げよう！あいさつの輪	北区立稲付中学校・2年	野寺やすみ
	きれいな町を目指して	荒川区立原中学校・3年	平塚　直史
	魔法の笑顔	千代田区立九段中等教育学校・1年	福田　耀子
	家族と「生きる」	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	横山　愛聖

平成19年度（第29回）　平成19年9月17日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	がまんの美徳	東京学芸大学附属小金井中学校・3年	入田　真実
優秀賞	前に向かって	港区立高松中学校・1年	葭原　華陽
会長奨励賞	将来の夢	江戸川区立小松川第一中学校・2年	赤嶺　綾乃
	「普通」の定義	西東京朝鮮第二幼初中級学校・3年	権　景華
	図書館の本は誰のもの	あきる野市立五日市中学校・3年	清水　美里
	共に生きていくために	東京都立両国高等学校附属中学校・2年	菅澤　藍
	名　前	東京都立両国高等学校附属中学校・2年	杉山　俊
	夏が来る	八王子市立ひよどり山中学校・3年	関山　友理
	銀	杉並区立和田中学校・3年	中村　綸子
	ドナーになった友人	東京シューレ葛飾中学校・2年	吉田　もも

平成20年度（第30回）　平成20年9月15日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	食べることは、心をつくること	葛飾区立常盤中学校・2年	郡司　佳奈
優秀賞	「いきる」	江戸川区立小松川第一中学校・3年	赤嶺　綾乃
会長奨励賞	一枚の写真を通して	中野区立第五中学校・2年	青山紗都子
	おばあちゃんとの挨拶	東京学芸大学附属小金井中学校・3年	阿吹　綾香
	がんばることを楽しむ	千代田区立九段中等教育学校・3年	大林　尚嗣
	命の大切さ	東京文化中学校・1年	谷　ありす
	エレベーター内のあいさつ	東京都立桜修館中等教育学校・2年	藤井　愛衣
	気配り・目配り・心配りを大切に	東京学芸大学附属国際中等教育学校・2年	水田　詩文
	本当の家族とは　～養育家庭制度を通して～	八王子市立七国中学校・2年	山口そな恵
	思いやりの道徳心	足立区立第四中学校・3年	横田　睦月

平成21年度（第31回）　平成21年9月13日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	未来を築く思いやり	府中市立府中第五中学校・３年	松本茉美子
優秀賞	言葉で伝える大切さ	杉並区立和田中学校・３年	水上　朋子
会長奨励賞	祖父の教え	港区立高松中学校・３年	井戸川弘毅
	お互いさま精神	東京学芸大学附属小金井中学校・２年	入江　万優
	メールとコミュニケーション	東京都立桜修館中等教育学校・３年	岸　美里
	「ＭＯＴＴＡＩＮＡＩ」	武蔵野東中学校・２年	坪井千羽実
	金色のルール	東京都立桜修館中等教育学校・３年	林　眞樹
	「教えない」という教え	あきる野市立五日市中学校・３年	久永明日葉
	十人十色の薬味	東京電機大学中学校・３年	藤原　章子
	父さん母さん ── 「ありがとう」	青梅市立第三中学校・１年	松藤　晶子

平成22年度（第32回）　平成22年9月12日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	僕の妹	葛飾区立青葉中学校・１年	光丸　英樹
	＊＊全国大会出場（平成22年11月7日・国立オリンピック記念青少年総合センター）国立青少年教育振興機構奨励賞＊＊		
優秀賞	地域活動でふるさとを豊かにしよう	東京学芸大学附属小金井中学校・１年	出川　佳歩
	言葉と命	世田谷区立太子堂中学校・３年	田中弥也子
会長奨励賞	同情するなら、手を貸そう !!	葛飾区立大道中学校・２年	糸賀　貴優
	僕と挨拶の十三年間	八王子市立七国中学校・１年	宇野　勝哉
	「口で話そう、伝えよう」	板橋区立板橋第一中学校・３年	小林　豪
	小さな一言の小さな勇気	東京学芸大学附属小金井中学校・１年	佐藤　陽
	大事な気持ち	星美学園中学校・３年	高野　未来
	命の大切さ～私が語れるようになったこと～	八王子市立七国中学校・３年	武石　彩香
	「見えないものに包まれて」	東大和市立第一中学校・３年	森脇　菫子

平成23年度（第33回）　平成23年9月11日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	家族の本当の意味	葛飾区立常盤中学校・２年	齊藤　麗香
	＊＊全国大会出場（平成23年11月13日・国立オリンピック記念青少年総合センター）国立青少年教育振興機構理事長賞＊＊		
優秀賞	犬を飼う責任	葛飾区立四ツ木中学校・１年	田原　佳苗
	私のお姉ちゃん	中村中学校・１年	堀　由乃
会長奨励賞	「桜井さんのコスモス」	中野区立第五中学校・２年	青山　広樹
	身近な伝統を未来に伝えよう	東京学芸大学附属小金井中学校・２年	出川　佳歩
	「いま」を変えていく	武蔵野東中学校・１年	鎌本　紗衣
	音の頼り	東京学芸大学附属小金井中学校・２年	佐々木亜利
	友達	東村山市立東村山第五中学校・３年	友利　奈月
	計画停電の夜	芝中学校・２年	庭　祐
	「江戸の心、平成の心」	東京都立両国高等学校附属中学校・２年	樋山　輝

平成24年度（第34回）　平成24年9月9日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	勇気を出して踏み出そう	調布市立第五中学校・３年	松本　郁成
優秀賞	五文字の言葉で	東京都立立川国際中等教育学校・３年	隈江　加奈
会長奨励賞	心のキャッチボール	東京学芸大学附属小金井中学校・２年	阿知波ひとみ
	母の存在	杉並区立和田中学校・２年	河嵜　陽子
	「もっと幸せを感じて」	東京都立桜修館中等教育学校・２年	榊原理彩子
	万引き	東京都立立川国際中等教育学校・３年	髙橋　沙綾
	人の温かさ	東京都立南多摩中等教育学校・１年	千野　杏子
	神様からの挑戦状	青梅市立第三中学校・１年	長谷川笑花
	祖母が私に教えてくれた事	清瀬市立清瀬第五中学校・２年	山下　澄恋
	「命の意味」	東京都立桜修館中等教育学校・２年	山下　大器

平成25年度（第35回）　平成25年9月8日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	手をさしのべること	東京都立富士高等学校附属中学校・３年	深澤ゆかり
優秀賞	携帯はいらない	町田市立鶴川第二中学校・２年	鈴木　彩乃
会長奨励賞	優しさの連鎖、はじめの一歩	東京都立武蔵高等学校附属中学校・３年	福島ゆきの
	「人をつなぐ言葉」	稲城市立稲城第四中学校・２年	石塚なつの
	勇気の向こうに	葛飾区立立石中学校・１年	小西　泰聖
	コミュニケーション能力を高めよう	東京学芸大学附属小金井中学校・２年	坂井　真衣
	強くするもの	調布市立第四中学校・３年	佐藤　亜桜
	「優しさ」	國學院大学久我山中学校・３年	下田　百江
	受け継ぐべき生き方	世田谷区立玉川中学校・２年	鈴木　日和
	あいさつは大切	東京都立桜修館中等教育学校・１年	十時　優太

平成26年度（第36回）　平成26年9月15日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	助け合いにつながる言葉	立川市立立川第六中学校・３年	小林　晴日
	＊＊全国大会出場（平成26年11月9日・国立オリンピック記念青少年総合センター）奨励賞＊＊		
	「あの日から」	品川区立城南中学校・３年	渡来　由麻
優秀賞	規則よりも大事なこと	足立区立第一中学校・３年	穴穂　省伍
	おもてなしの心	葛飾区立東金町中学校・１年	石出　咲紀
	前進とは	杉並区立和泉中学校・３年	加藤　実優
	高齢社会と向きあう	東京学芸大学附属小金井中学校・２年	阪本　雅登
	言葉に責任を持つということ	杉並区立井荻中学校・３年	末松　愛菜
	空き缶と私の存在	國學院大學久我山中学校・３年	杉浦　有香
	小さな絆を大きな輪に変えよう	立川市立立川第二中学校・３年	天神　マオ
	みんなに「ありがとう」と伝えたい	目黒区立東山中学校・３年	福住　旺穫

平成27年度（第37回）　平成27年9月6日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
知事賞	中国と日本の狭間にて	板橋区立中台中学校・3年	張　哲語
	＊＊全国大会出場（平成27年11月8日・国立オリンピック記念青少年総合センター）文部科学大臣賞＊＊		
東京都教育委員会賞	私のたった一つの決まり事	武蔵村山市立第五中学校・3年	滝島　涼
	広島へ行き学んだこと	清瀬市立清瀬中学校・3年	降矢　麻友
	パラリンピックへの夢	目黒区立第七中学校・3年	吉越　奏詞
会長賞	小さな気遣いを大切に	星美学園中学校・3年	井出　薫乃
	あいさつのすゝめ	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	伊藤　万由
	「トイレ掃除から学ぶ想い」	立川市立立川第三中学校・3年	加藤　美柚
	助け合い、支え合う	國學院大學久我山中学校・3年	松尾　亜祐
	小さな器	品川区立小中一貫校品川学園・3年	柳町　爽瑛
	思いやりの大切さ	東京都立両国高等学校附属中学校・1年	渡邊　友宏

平成28年度（第38回）　平成28年9月11日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
知事賞	感じる	杉並区立井荻中学校・3年	今本　吉治
東京都教育委員会賞	母への言葉	葛飾区立四ツ木中学校・3年	牛久　友萌
	命の大切さ	荒川区立第七中学校・2年	吉田　真萌
会長賞	人のことを考える	足立区立六月中学校・3年	相場　弘貴
	あいさつの人	渋谷区立原宿外苑中学校・3年	池山　明恵
	おもてなしの国、日本	東京都立桜修館中等教育学校・1年	今井　一輝
	命への感謝	立川市立立川第六中学校・3年	小林　岳
	ぼくが一人で電車に乗れるようになるまで	共栄学園中学校・1年	榊原　丈稀
	弱小野球部の軌跡	世田谷区立用賀中学校・3年	白井　蓮
	言葉とナイフと霊（たましい）と	東京学芸大学附属小金井中学校・3年	吉川　仁

参考　平成二十九年度　少年の主張全国大会

内閣総理大臣賞受賞作品

仲間を守る一言

新潟県立燕中等教育学校　二年
平澤幸芽

「Aちゃんをはぶろうよ。」

もし、友達にこう言われたら、あなたは本当の自分の意見が言えますか。私は言えませんでした。だから私は、この主張をします。かつてのAちゃんみたいな人が、少しでも減ることを願って。

「Aちゃんをはぶろうよ。」

仲の良い友達から、突然言われた一言だった。私には、Aちゃんを嫌う理由がなかったから、頭の中が疑問だらけだった。「昨日まで、仲良くしていたのに、何でいきなり?」しかし、その疑問は口に出せないまま、なんとなくうなずくだけで、のどの奥に沈んでいった。

次の日から、身近な友達の全員がAちゃんを無視し始めた。Aちゃんが近づいてくると離れ、Aちゃんの話を遮るように誰かが話を始め、Aちゃんをわざと一人にした。だんだんとAちゃんから笑顔が消え、やがて近づいてこなくなった。周りの友達は笑っていた。

私は「こんなことをしてはいけない」「こんなのいじめだ」と分かっていた。目の前で繰り返される残酷な光景に対して、分かってはいたが、声が出なかった。これを言ってしまったらどうなるのだろうか。Aちゃんともう一度仲良くなれるのだろうか。それとも，次は自分がはぶられるのだろうか。自分がはぶられることは、絶対に嫌だった。だから私は、周りの人に合わせて、意味もなく笑った。自分の意見が言えないまま。Aちゃんを避け続けた。

それからというもの、友達という存在が、「楽しい人」から「疲れる人」へと変わっていった。もう一緒にいるのも疲れてしまい、面倒だった。けれど、嫌われたくないから、とりあえず何でも「うん」と答えた。私はそんな「友達」が嫌いだった。しかし、もっともっと嫌いな人がいた。それは自分自身だった。はっきりと「良い」も「悪い」も言えない自分が大嫌いだった。ある夜、ノートに真っ赤な文字で、「大っ嫌い、大っ嫌い。死ね死ね死ね……」と書き殴った。そのページの一番上に、はっきりと「自分なんか」と書いていた。

そんな中、インターネットを開き、画面に目を通していると、私はある言葉と出会った。「過去と他人は変えられないが、未来と自分は変えられる。」

それを見た瞬間、ドキッとした。まるで今の状況を理解して、私のために書かれているかのような言葉だったからだ。その時やっと気づくことができた。自分が変わらなければならないということを。私が言うべき言葉は「うん」という「自分を守るための言葉」ではなく、「こんなのいじめだよ。もうやめよ！」という、「大切な仲間を守るための言葉」だったということを。

「ねえ、もう、やめよ。」次の日、あの言葉に背中を押され、勇気を出して、私は友達に伝えた。「……うん。」少し間を置いて、友達は私の言葉を受け止めてくれた。そして、みんなでAちゃんに謝った。

今年6月、県内の中学2年生がいじめを苦にして、自らの命を絶った。同い年の子が、私が想像もできないくらいの、痛みや苦しみを抱えて命を絶ったであろうことにショックを受けた。それと同時に、もしAちゃんを避け続けていたとしたらと考えたとき、私は恐ろしい気持ちになった。誰も、彼を守ってあげられなかったのだろうか。周囲の人たちはみな、私のように、救いの一言を飲み込んでしまったのだろうか。「やめようよ。」その一言は、命が失われてからでは遅い。いじめは人を死に追いやる。だからこそ、周囲の態度は、それに対して責任をもたなければならないと思う。

私は、今では仲の良い友達にも「良い」「悪い」と自分の思いを伝えている。安易に同調することだけが、友達ではないからだ。それから、「なんでもいい」という言葉はあまり使わないようにしている。「なんでもいい」は自分の意見を言うことを放棄していることであり、無責任な態度だからだ。今でも時々、「○○ちゃんってうざくない？」そんな言葉を耳にする。でも私は、「私はそんなことないと思うよ」と、責任をもって、自分の意見を言うようにしている。その一言が、周りの大切な仲間を守る一言になるからだ。

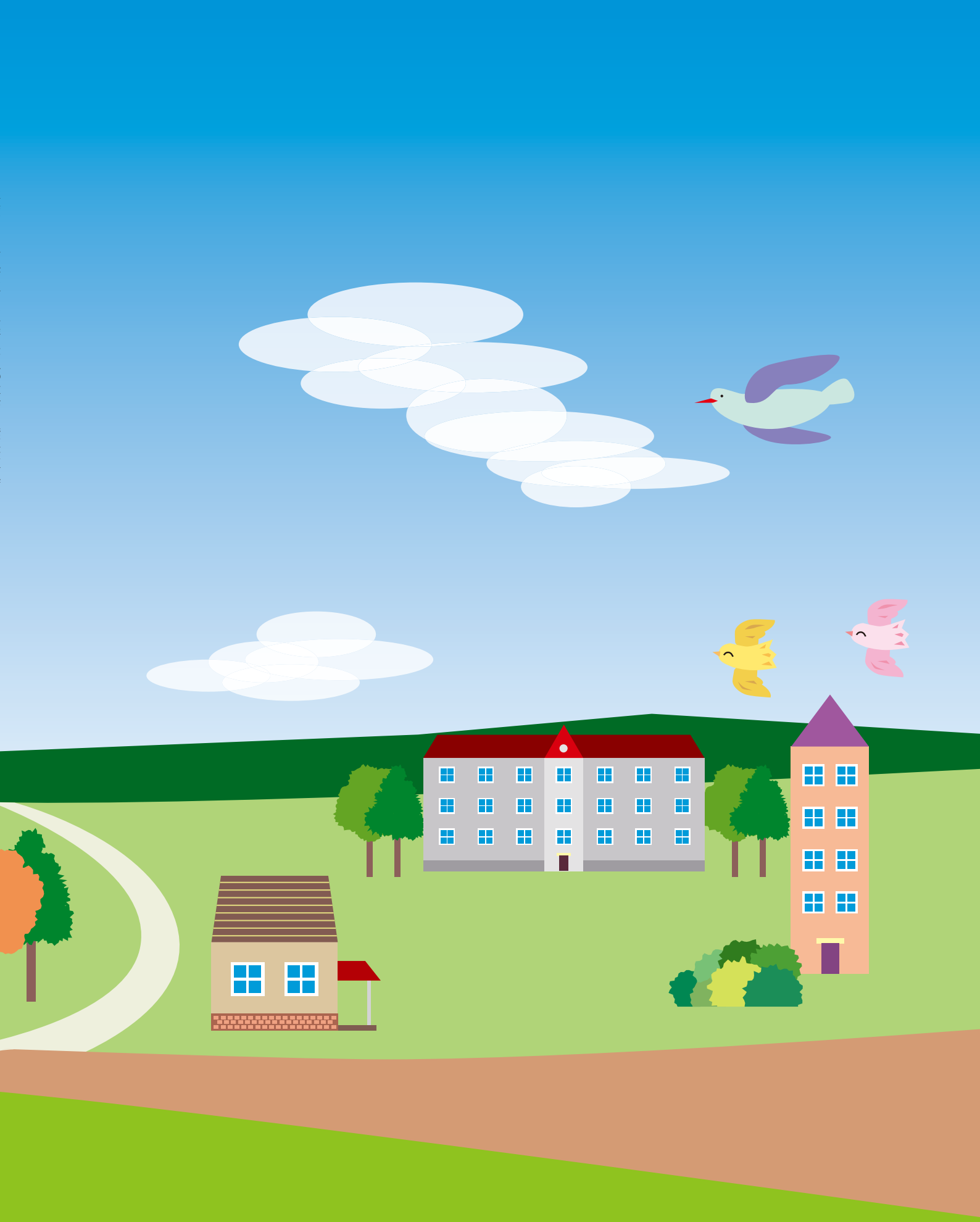
平成 29 年度

平成 29 年 12 月発行

平成 29 年度　中学生の主張東京都大会　発表文集

編集・発行／こころの東京革命協会
〒 163-8001　東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
東京都庁第一本庁舎北塔 34 階
電話（03）5388-3064
印刷／株式会社アイフィス
〒 112-0005　東京都文京区水道二丁目 10 番 13 号
電話（03）5395-1201

古紙パルプ配合率100%再生紙を使用しています。



東京都　こころの東京革命協会

本事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構より委託をうけて実施しております。